

設置計画の概要

事項	記入欄
事前相談事項	事前伺い
計画の区分	研究科の専攻の設置
フリガナ設置者	コクリツダイガクホウジン トウキョウノウコウダイガク 国立大学法人 東京農工大学
フリガナ大学の名称	トウキョウノウコウダイガク 東京農工大学 (Tokyo University of Agriculture and Technology)
新設学部等における教育研究上の目的、養成する人材像	<p>【大学院農学府農学専攻】</p> <p>①養成する人材像 農学と関連分野における専門に立脚した高度な知識と技術を持ち、国内外の諸課題を解決するために専門分野を超えた持続的 社会創成へ向けての幅広い知識に基づく俯瞰的な思考力を身につけ、深い学識と研究能力により、国内外のさまざまな現場 における課題解決型技術者として活躍できる国際通用性のある人材、もしくは使命感志向型博士課程への高度人材としての素地を 養成する。</p> <p>②教育研究上の目的 ①の人材を養成するために、以下の能力・知識を身につけさせる。 A 持続的社会に必要となる人口・食料・資源・環境問題の解決に不可欠である、食糧・健康・生命機能・生物資源・資源管理・情 報・農村社会基盤などの農林学や生命科学に関する高度専門知識と技術力 B 個々の専門領域において個別の専門性を身につけながら、社会の持続的発展のための貢献を使命とし、自然と人間および 社会と分野に関して深い理解と洞察をなしうる、俯瞰的視野を持ち国際人として活躍できる素養と教養 C 課題探求能力を持ち、社会要請にこたえて、科学的手法を駆使しつつ、現場に立脚した問題解決を図る能力を養成しつつ、 研究倫理を尊び、自ら研究・調査した結果を報文や論文としてまとめ、学会や国際会議などで発表できる能力 D 豊かなコミュニケーション能力を備え、諸外国の歴史や文化を理解し、専門性と学際性を両立させながら、国際社会において 指導的立場で活躍できる能力</p> <p>③修了後の進路 農学・林学・水産学研究者、農学技術者、畜産技術者、化学品開発・生産・製造技術者、化学製品生産設備制御・監視員、分 析化学技術者、食品開発・製造技術者、食品品検査工、食品品生産設備制御・監視員、環境コンサルタント、環境衛生技術者、 林学技術者、工学研究者、システム設計技術者、人文科学研究者、大学教員、中学校・高等学校教員、国家公務員・地方公務 員、大学院博士課程進学</p>
既設学部等における教育研究上の目的、養成する人材像	<p>【大学院農学府】</p> <p>①養成する人材像 農学、生命科学、環境科学分野の諸課題の解決と持続発展可能な社会の形成に資するため、広い視野に立つとともに専攻分 野における精深な学識を授け、豊かな教養、高い倫理観と国際感覚を具備し、共生社会を構築して人類社会に貢献できうる、指 導的研究者・技術者・高度専門職業人を養成する。</p> <p>②教育研究上の目的 農学とそれに関連した食料・生命・資源・環境に関わる自然科学・社会科学について、以下の能力・知識を身につけさせる。 A 先端的かつ高度な専門的知識と論理的かつ柔軟な思考力(学力・知識・思考力) B 独創的・革新的な研究を率先して行うための課題探求能力・企画力・実行力(企画力・実践力・発展) C 専門領域における高度な科学的研究手法(技術・分析力・考察力) D 社会的倫理観、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力(関心・意欲・態度・表現力)</p> <p>【大学院農学府生物生産科学専攻】</p> <p>①養成する人材像 食料生産技術と環境保全の調和、持続的な生物生産の確立、食料自給率向上や安定供給、動植物の生産機能の解明、バイ オマス利活用技術の開発等に貢献する能力を有する、広い視野に立つ専門家及び研究者を養成する。この目的を達するため前 記専門分野における革新的学術研究を併せて実施する。</p> <p>②教育研究上の目的 ①の人材を養成するために、以下の能力・知識を身につけさせる。 A 我が国における食料自給率向上とその安定供給および世界の食料生産向上、食料生産と環境保全の調和のための持続的 な生物生産技術の開発、動植物の生産機能の解明等に関する高度な専門的知識と論理的かつ柔軟な思考力 B 生物生産科学の専門領域において独創性の高い科学を担い、画期的な技術革新を実現し、社会の発展を持続させるため にとるべき施策を提起することを自らの使命と認識していること。 C 生物生産科学の専門領域における高度な科学的研究手法 D 生物生産科学の専門あるいは関連する領域の研究者に自らの研究成果をアピールし、相互に理解を深めるためのプレゼン テーション能力とコミュニケーション能力。研究成果を世界に向けて発信するために必要なレベルの語学能力</p> <p>③修了後の進路 国家公務員、地方公務員、農学・林学・水産学研究者、農業技術者、畜産技術者、食品開発技術者、食品製造技術者、高等 学校教員、中学校教員、大学院博士課程進学</p> <p>【大学院農学府共生持続社会学専攻】</p> <p>①養成する人材像 人文社会科学分野において、農学諸分野の科学技術を理解し、企画・課題遂行・調整などに卓越した能力を有する、広い視野 に立つ専門家及び研究者を養成する。この目的を達するため共生人間学・環境社会関係学・食糧環境経済学の専門分野にお ける革新的学術研究を併せて実施する。</p> <p>②教育研究上の目的 ①の人材を養成するために、以下の能力・知識を身につけさせる。 A 環境共生型の持続可能な社会構築のために、農学諸分野の科学技術にかかわる基礎知識を踏まえて、人文社会科学の総 合的視点からのアプローチに基づく教育と研究にかかわる所定の課程を修めていること。 B それぞれの専門領域において独創性の高い研究を行い、持続的な共生社会の発展のために専門的な立場から貢献するこ とを自らの使命と認識していること。 C それぞれの専門領域における高度な科学的研究手法に関する能力。 D 研究成果を国内および世界に向けて発信するために必要なレベルの表現能力もしくは語学能力、及び研究者相互に理解を 深めるためのコミュニケーション能力。</p> <p>③修了後の進路 農学・林学・水産学研究者、人文科学研究者、農業技術者、食品開発技術者、食品製造技術者、システム設計技術者、高等学 校教員、大学教員、総務事務員、商品企画事務員、営業事務員、公務員、大学院博士課程進学</p>

【大学院農学府応用生命化学専攻】

①養成する人材像

生体分子化学、生理生化学、分子生物学、環境老年学などの生命機能を理解し応用する専攻分野において卓越した能力を有する、広い視野に立つ専門家及び研究者を養成する。この目的を達するため前記専門分野における革新的学術研究を併せて実施する。

②教育研究上の目的

①の人材を養成するために、以下の能力・知識を身につけさせる。

A 生命活動を分子と分子、分子と細胞、ならびに分子と個体との相互関係という視点でとらえ、生命現象と生物機能を理解するための、高度な専門知識と論理的かつ柔軟な思考力。

B 応用生命化学の専門領域において独創的・革新的な研究を率先して行うための課題探究能力・企画力・実行力

C 応用生命化学の専門領域における、高度な科学的研究手法

D 応用生命化学の分野に関する研究を通して、高い倫理性をもって社会の発展に貢献することを自らの使命と認識するとともに、成果を発信するためのコミュニケーション能力およびプレゼンテーション能力

③修了後の進路

農学・林学・水産学研究者、食品開発技術者、化学品開発技術者、食品製造技術者、化学品生産技術者、分析化学技術者、医薬品営業員、食料品検査工、食料品生産設備制御・監視員、化学製品生産設備制御・監視員、公務員、大学院博士課程進学

【大学院農学生物制御科学専攻】

①養成する人材像

植物、微生物、昆虫などの生物の制御及び生物間相互作用に関する研究分野において卓越した能力を有する、広い視野に立つ専門家及び研究者を養成する。この目的を達するため前記専門分野における革新的学術研究を併せて実施する。

②教育研究上の目的

①の人材を養成するために、以下の能力・知識を身につけさせる。

A 植物・昆虫・微生物・ウイルス等において、生物間の相互作用・環境適応応答・適応機序・遺伝・発生・生理機能の仕組みを、分子レベル・個体・個体群・群集に至る境界・複合領域的な専門知識と論理的、科学的な思考力に基づいて理解していること。

B 生物制御科学の専門および関連領域における研究を理解し、目的を明確にして計画を立案でき、独創的な研究を遂行できる企画力と実行力を習得

C 生物機能制御学および生物適応制御学に関する高度で専門的な実験手法を習得し、実験結果を分析・考察して論文をまとめる能力。

D 生物制御科学の専門領域に関する演習、研究発表を通じて、研究成果を社会に発信し、最先端科学を牽引するための表現

③修了後の進路

農学研究者、農学技術者、化学品開発・生産・製造技術者、分析科学技術者、食品開発・製造技術者、食料品検査工、食料品生産設備制御・監視員、医農薬営業員、国家公務員、地方公務員、中学校・高等学校教員、大学院博士後期課程

【大学院農学府環境資源物質科学専攻】

①養成する人材像

環境資源物質科学分野において卓越した能力を有する、広い視野に立つ専門家及び研究者を養成する。特に資源物質の構造解析や機能、利用技術、環境への影響・負荷の低減化に寄与できる人材を育成する。この目的を達するため前記専門分野における革新的学術研究を併せて実施する。

②教育研究上の目的

①の人材を養成するために、以下の能力・知識を身につけさせる。

A 植物バイオマス資源・物質の生産、変換利用、再資源化、分解、廃棄、保存など低環境負荷の資源利用システムや、資源の物理化学的・光学的特性解析・および有機化学反応論などの基礎科学に関する高度な専門知識と研究技術

B 専門領域において独創性の高い科学を担い、画期的な技術革新を実現し、社会の発展を持続させるためにとるべき施策を提起することを自らの使命と認識していること。

C 汎用性の高い高度な研究能力

D 自らの研究成果を国内外で発表して理解を得るために必要なコミュニケーション能力と語学力

③修了後の進路

農学・林学・水産学研究者、農学技術者、林学技術者、工学研究者、化学品開発技術者、化学品製造技術者、分析科学技術者、食品開発技術者、食品製造技術者、環境衛生技術者、公務員、大学院博士課程進学

【大学院農学府物質循環環境科学専攻】

①養成する人材像

環境化学及び環境生物学分野において卓越した能力を有する、広い視野に立つ専門家及び研究者を養成する。この目的を達するため前記専門分野における革新的学術研究を併せて実施する。

②教育研究上の目的

①の人材を養成するために、以下の能力・知識を身につけさせる。

A 21世紀の人類が直面している環境問題の解決に貢献しうる環境化学ないし環境生物学分野の高度な専門知識と研究技術

B 専門領域において独創性の高い科学を担い、環境問題の解決を導く施策を提起することを自らの使命と認識していること。

C 物質循環環境科学における高度な科学的研究手法、研究技術を修得し、実験結果を分析・考察して論文をまとめる能力

D 専門あるいは関連する領域の研究者に自らの研究成果をアピールし、相互に理解を深めるためのプレゼンテーション能力とコミュニケーション能力、研究成果を世界に向けて発信するために必要なレベルの語学能力

③修了後の進路

環境コンサルタント、環境アセスメント、化学品・薬品開発技術者、化学分析技術者、食品開発技術者、環境衛生技術者、公務員(国家・地方)、大学院博士課程進学

【大学院農学府自然環境保全学専攻】

①養成する人材像

野生生物、山地・森林、都市及び人間を対象にして、自然環境の持続的利用と保護及び回復に関わる自然環境保全学分野において卓越した能力を有する、広い視野に立つ専門家及び研究者を養成する。この目的を達するため前記専門分野における革新的学術研究を併せて実施する。

②教育研究上の目的

①の人材を養成するために、以下の能力・知識を身につけさせる。

A 自然環境保全学に必要な自然科学・社会科学や情報処理技術を備え、地球的視点から自然環境を多面的に捉え、持続的な利用と保全を考究する高度な専門知識と論理的かつ柔軟な思考力

B 自然環境保全学専攻の専門領域において独創性の高い科学を担い、画期的な技術革新を実現し、社会の発展を持続させるためにとるべき施策を提起することを自らの使命と認識し、その実践のために必要な課題探究能力・企画力・実行力

C 自然環境保全学における高度な科学的研究手法、研究技術

D 自然環境保全学専攻の専門あるいは関連する領域の研究者に自らの研究成果をアピールし、相互に理解を深めるためのプレゼンテーション能力・語学能力とコミュニケーション能力を持ち、自然環境の持続的な利用と保全に関する諸問題の解決のためのデザイン能力

③修了後の進路

農学・林学・水産学研究者、林業技術者、システム設計技術者、環境コンサルタント技術者、高等学校教員、専修学校教員、学芸員、総合事務員、営業事務員、情報システム営業員、公務員、大学院博士課程進学

	<p>【大学院農学府農業環境工学専攻】</p> <p>①養成する人材像 農学と工学の手法を駆使して、海外も含めた農山村地域の発展に貢献し、持続的食料生産システムや地域環境整備を行う農業環境工学分野において卓越した能力を有する、広い視野に立つ専門家及び研究者を養成する。この目的を達するため前記専門分野における革新的学術研究を併せて実施する。</p> <p>②教育研究上の目的 ①の人材を養成するために、以下の能力・知識を身につけさせる。 A 生命現象のメカニズム、生物の生産と利用、地域のレベルから地球規模に至る環境保全、人類の食糧問題等に関する高度な専門知識と研究技術 B 農学と工学の手法を駆使した独創性の高い科学を担い、画期的な技術革新を実現し、社会の発展を持続させるためにとるべき施策を提起することを自らの使命と認識していること。 C 農業環境工学分野における高度な科学的研究手法 D 自らの研究成果をアピールし、相互に理解を深めるためのプレゼンテーション能力とコミュニケーション能力、研究成果を世界に向けて発信するために必要なレベルの語学能力</p> <p>③修了後の進路 農学・林学・水産学研究者、人文科学研究者、農業技術者、食品開発技術者、食品製造技術者、システム設計技術者、高等学校教員、大学教員、総務事務員、商品企画事務員、営業事務員、公務員、大学院博士課程進学</p> <p>【大学院農学府国際環境農学専攻】</p> <p>①養成する人材像 学際的な環境農学分野において、国際的視野を持ち、諸外国の文化を理解し、国際社会において指導的立場で活躍できる専門家及び研究者を養成する。この目的を達するために前記専門分野における革新的学術研究を併せて実施する。</p> <p>②教育研究上の目的 ①の人材を養成するために、以下の能力・知識を身につけさせる。 A 環境農学、すなわち農学の伝統を基礎としつつ、食糧問題、環境問題等各種のグローバル・イシューを緩和し解決するべく、環境の修復・保全、環境に負荷を与えない食糧生産体系の確立、さらには地域開発・国際協力の実践を含む、農学・農学関連諸分野の最先端の成果に関する学識・見識 B それぞれの専門領域において、環境農学の成果を具体的かつ創造的に適用しうる地域開発リーダー、専門的技術者、さらに一定の国際水準を満たす実践的な教育・研究者として活躍できる素養と教養を兼備していること。 C 環境農学において必要な問題解決能力を養い、高度な専門知識と研究能力 D 諸外国語、特に英語によるコミュニケーション能力</p> <p>③修了後の進路 管理的公務員、農業関連団体職員、農林水産試験研究機関研究員・技術者、中高等学校教員、食品製造業、大学院博士後期課程</p>
<p>新設学部等において取得可能な資格</p>	<p>【農学府農学専攻】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学・高校教諭専修免許状(理科) ・高校教諭専修免許状(農業) <p>① 国家資格 ② 資格取得可能 ③ 1種免許状をすでに取得している者又は取得資格を満たしている者で、教育職員免許法上の教科に関する科目として認定されている授業科目を24単位以上修得し、かつ、修士課程を修了すること。</p>
<p>既設学部等において取得可能な資格</p>	<p>【農学府生物生産学専攻】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学・高校教諭専修免許状(理科) ・高校教諭専修免許状(農業) <p>① 国家資格 ② 資格取得可能 ③ 1種免許状をすでに取得している者又は取得資格を満たしている者で、教育職員免許法上の教科に関する科目として認定されている授業科目を24単位以上修得し、かつ、修士課程を修了すること。</p> <p>【農学府共生持続社会学専攻】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学・高校教諭専修免許状(理科) ・高校教諭専修免許状(農業) <p>① 国家資格 ② 資格取得可能 ③ 1種免許状をすでに取得している者又は取得資格を満たしている者で、教育職員免許法上の教科に関する科目として認定されている授業科目を24単位以上修得し、かつ、修士課程を修了すること。</p> <p>【農学府応用生命化学専攻】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学・高校教諭専修免許状(理科) <p>① 国家資格、② 資格取得可能 ③ 1種免許状をすでに取得している者又は取得資格を満たしている者で、教育職員免許法上の教科に関する科目として認定されている授業科目を24単位以上修得し、かつ、修士課程を修了すること。</p> <p>【農学府生物制御科学専攻】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学・高校教諭専修免許状(理科) <p>① 国家資格 ② 資格取得可能 ③ 1種免許状をすでに取得している者又は取得資格を満たしている者で、教育職員免許法上の教科に関する科目として認定されている授業科目を24単位以上修得し、かつ、修士課程を修了すること。</p> <p>【農学府環境資源物質科学専攻】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学・高校教諭専修免許状(理科) <p>① 国家資格 ② 資格取得可能 ③ 1種免許状をすでに取得している者又は取得資格を満たしている者で、教育職員免許法上の教科に関する科目として認定されている授業科目を24単位以上修得し、かつ、修士課程を修了すること。</p> <p>【農学府物質循環環境科学専攻】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学・高校教諭専修免許状(理科) <p>① 国家資格 ② 資格取得可能 ③ 1種免許状をすでに取得している者又は取得資格を満たしている者で、教育職員免許法上の教科に関する科目として認定されている授業科目を24単位以上修得し、かつ、修士課程を修了すること。</p> <p>【農学府自然環境保全学専攻】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学・高校教諭専修免許状(理科) ・高校教諭専修免許状(農業) <p>① 国家資格 ② 資格取得可能 ③ 1種免許状をすでに取得している者又は取得資格を満たしている者で、教育職員免許法上の教科に関する科目として認定されている授業科目を24単位以上修得し、かつ、修士課程を修了すること。</p> <p>【農学府農業環境工学専攻】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学・高校教諭専修免許状(理科) ・高校教諭専修免許状(農業) <p>① 国家資格 ② 資格取得可能 ③ 1種免許状をすでに取得している者又は取得資格を満たしている者で、教育職員免許法上の教科に関する科目として認定されている授業科目を24単位以上修得し、かつ、修士課程を修了すること。</p>

【農学府国際環境農学専攻】 ・中学・高校教諭専修免許状(理科) ・高校教諭専修免許状(農業) ① 国家資格 ② 資格取得可能 ③ 1種免許状をすでに取得している者又は取得資格を満たしている者で、教育職員免許法上の教科に関する科目として認定されている授業科目を24単位以上修得し、かつ、修士課程を修了すること。																																																				
新設学部等の概要	新設学部等の名称		修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	授与する学位等		開設時期	専任教員																																										
							学位又は称号	学位又は学科の分野		異動元	助教以上	うち教授																																								
新設学部等の概要	農学府 [Graduate School of Agriculture]	農学専攻 [Department of Agriculture]	2	174	-	348	修士(農学) 修士(学術)	農学関係	平成31年4月	農学府生物生産科学専攻	17	5																																								
										農学府共生持続社会学専攻	15	5																																								
										農学府応用生命化学専攻	15	8																																								
										農学府生物制御科学専攻	10	6																																								
										農学府環境資源物質科学専攻	11	4																																								
										農学府物質循環環境科学専攻	11	5																																								
										農学府自然環境保全学専攻	15	2																																								
										農学府農業環境工学専攻	8	3																																								
										農学府国際環境農学専攻	9	3																																								
										農学府共同獣医学専攻	26	9																																								
計										137	50																																									
既設学部の概要	農学府	生物生産科学専攻(廃止)	2	27	-	54	修士(農学) 修士(学術)	農学関係	平成11年4月	農学府農学専攻	17	5																																								
										計										17	5																															
										既設学部の概要	農学府	共生持続社会学専攻(廃止)	2	12	-	24	修士(農学) 修士(学術)	農学関係	平成11年4月	農学府農学専攻	15	5																														
																				計										15	5																					
																				既設学部の概要	農学府	応用生命化学専攻(廃止)	2	30	-	60	修士(農学) 修士(学術)	農学関係	平成11年4月	農学府農学専攻	15	8																				
																														計										15	8											
																														既設学部の概要	農学府	生物制御科学専攻(廃止)	2	20	-	40	修士(農学) 修士(学術)	農学関係	平成11年4月	農学府農学専攻	10	6										
																																								計										10	6	
																																								既設学部の概要	農学府	環境資源物質科学専攻(廃止)	2	11	-	22	修士(農学) 修士(学術)	農学関係	平成11年4月	農学府農学専攻	11	4
																																																		計		
既設学部の概要	農学府	物質循環環境科学専攻(廃止)	2	17	-	34	修士(農学) 修士(学術)	農学関係	平成11年4月																																									農学府農学専攻	11	5
																																																		計		
										既設学部の概要	農学府	自然環境保全学専攻(廃止)	2	19	-	38	修士(農学) 修士(学術)	農学関係	平成11年4月																															農学府農学専攻	15	2
																																																		計		
																				既設学部の概要	農学府	農業環境工学専攻(廃止)	2	10	-	20	修士(農学) 修士(学術)	農学関係	平成11年4月																					農学府農学専攻	8	3
																																																		計		
																														既設学部の概要	農学府	国際環境農学専攻(廃止)	2	28	-	56	修士(農学) 修士(学術)	農学関係	平成11年4月											農学府農学専攻	9	3
																																																		計		
																																								既設学部の概要	農学府	共同獣医学専攻	4	10	-	40	博士(獣医学)	獣医学関係	平成30年4月	農学府農学専攻	26	9
																																																		計		

【備考欄】
平成31年4月
工学府(博士後期課程) 共同専攻の設置(平成30年3月意見伺い)
※構成大学: 東京外国語大学大学院総合国際学研究科、東京農工大学大学院工学府、
電気通信大学大学院情報理工学研究科
共同サステイナビリティ研究専攻(4)
工学府(博士後期課程) 定員減
電子情報工学専攻(△4)
農学府 改組(平成30年4月事前伺い)
生物生産科学専攻(△27)
共生持続社会学専攻(△12)
応用生命化学専攻(△30)
生物制御科学専攻(△20)
環境資源物質科学専攻(△11) → 農学専攻(174)
物質循環環境科学専攻(△17)
自然環境保全学専攻(△19)
農業環境工学専攻(△10)
国際環境農学専攻(△28)
※平成31年4月募集停止

工学部 改組(平成30年4月事前伺い)

生命工学科(△77)		生命工学科(81)
(3年次編入学定員△11)		(3年次編入学定員11)
応用分子化学科(△46)		生体医用システム工学科(56)
(3年次編入学定員△5)		(3年次編入学定員6)
有機材料化学科(△41)		応用化学科(81)
(3年次編入学定員△5)		(3年次編入学定員10)
化学システム工学科(△35)		化学物理工学科(81)
(3年次編入学定員△5)	→	(3年次編入学定員7)
機械システム工学科(△116)		機械システム工学科(102)
(3年次編入学定員△16)		(3年次編入学定員16)
物理システム工学科(△56)		知能情報システム工学科(120)
電気電子工学科(△88)		(3年次編入学定員20)
(3年次編入学定員△20)		
情報工学科(△62)		
(3年次編入学定員△8)		

※平成31年4月募集停止(3年次編入学定員は平成33年4月募集停止)

※大学院設置基準第14条における教育方法の特例を実施する。

【施設・設備の状況】

校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計			
	校 舎 敷 地	237,007 m ²	0 m ²	0 m ²	0 m ²		237,007 m ²	
運 動 場 用 地	46,341 m ²	0 m ²	0 m ²	0 m ²	46,341 m ²			
小 計	283,348 m ²	0 m ²	0 m ²	0 m ²	283,348 m ²			
そ の 他	180,899 m ²	0 m ²	0 m ²	0 m ²	180,899 m ²			
合 計	464,247 m ²	0 m ²	0 m ²	0 m ²	464,247 m ²			
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計			
		131,288 m ² (131,288 m ²)	0 m ² (0 m ²)	0 m ² (0 m ²)	131,288 m ² (131,288 m ²)			
教 室 等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体		
	77室	45室	513室	10室 (補助職員3人)	0室 (補助職員0人)			
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称		室 数				
		農学府		137 室				
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体での 共用分を含む
		530,482 [176,338] (527,836 [176,074])	14,174 [7,038] (14,149 [7,030])	7,043 [6402] (7,043 [6,402])	2,992 (2,972)	0 (0)	0 (0)	
	計	530,482 [176,338] (527,836 [176,074])	14,174 [7,038] (14,149 [7,030])	7,043 [6402] (7,043 [6,402])	2,992 (2,972)	0 (0)	0 (0)	
図 書 館		面積	閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数		大学全体	
		6,907 m ²	897		544,889			
体 育 館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要					
		2,477 m ²	テニスコート	武道場	ゴルフ練習場ほか			

【既設学部等の状況】

大 学 の 名 称	国立大学法人 東京農工大学							
学 部 等 の 名 称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定員 超過率	開設 年度	所 在 地
	年	人	年次 人	人		倍		
【工学府】（博士前期課程）		340		940		1.04		〒184-8588 東京都小金井市中 町二丁目24番16号
生命工学専攻	2	58	-	116	博士（工学） 博士（学術）	1.06	平成16年度	
応用化学専攻	2	78	-	156	博士（工学） 博士（学術）	1.00	平成16年度	
機械システム工学専攻	2	70	-	140	博士（工学） 博士（学術）	1.04	平成16年度	
物理システム工学専攻	2	26	-	52	博士（工学） 博士（学術）	1.05	平成16年度	
電気電子工学専攻	2	66	-	132	博士（工学） 博士（学術）	1.05	平成16年度	
情報工学専攻	2	42	-	84	博士（工学） 博士（学術）	1.07	平成18年度	
【工学府】（博士後期課程）		60		180		1.02		
生命工学専攻	3	14	-	42	博士（工学） 博士（学術）	0.97	平成16年度	
応用化学専攻	3	14	-	42	博士（工学） 博士（学術）	1.14	平成16年度	
機械システム工学専攻	3	13	-	39	博士（工学） 博士（学術）	1.32	平成16年度	
電子情報工学専攻	3	19	-	57	博士（工学） 博士（学術）	0.75	平成18年度	
【工学府】（専門職学位課程）		40		80		0.92		
産業技術専攻	2	40	-	80	技術経営修士 （専門職）	0.92	平成23年度	

既設 大学等 の 状 況	【農学府】 (修士課程)		174		348		1.14		〒183-8509 東京都府中市幸町 三丁目5番8号
	生物生産科学専攻	2	27	-	54	修士(農学) 修士(学術)	1.24	平成16年度	
	共生持続社会学専攻	2	12	-	24	修士(農学) 修士(学術)	0.91	平成16年度	
	応用生命化学専攻	2	30	-	60	修士(農学) 修士(学術)	1.30	平成16年度	
	生物制御科学専攻	2	20	-	40	修士(農学) 修士(学術)	1.17	平成16年度	
	環境資源物質科学専攻	2	11	-	22	修士(農学) 修士(学術)	1.76	平成16年度	
	物質循環環境科学専攻	2	17	-	34	修士(農学) 修士(学術)	0.99	平成16年度	
	自然環境保全学専攻	2	19	-	38	修士(農学) 修士(学術)	1.04	平成16年度	
	農業環境工学専攻	2	10	-	20	修士(農学) 修士(学術)	0.80	平成16年度	
	国際環境農学専攻	2	28	-	56	修士(農学) 修士(学術)	1.01	平成16年度	
	【農学府】 (博士課程)		10		10		1.10		
	共同獣医学専攻	4	10	-	10	博士(獣医学)	1.10	平成30年度	
	【生物システム応用科学府】 (博士前期課程)	2	59		118		1.09		〒184-8588 東京都小金井市中 町二丁目24番16号
	生物機能システム科学 専攻	2	59	-	118	博士(工学) 博士(農学) 博士(学術)	1.09	平成27年度	
	生物システム応用科学 専攻	-	-	-	-	博士(工学) 博士(農学) 博士(学術)	-	-	
	【生物システム応用科学府】 (博士後期課程)		18		54		0.98		
	生物機能システム科学 専攻	3	12	-	36	博士(工学) 博士(農学) 博士(学術)	1.16	平成27年度	
	共同先進健康科学専攻	3	6	-	18	博士(生命科学)	0.60	平成22年度	
	生物システム応用科学 専攻	-	-	-	-	博士(工学) 博士(農学) 博士(学術)	-	-	
	【生物システム応用科学府】 (一貫制博士課程)	5	10		40		1.10		
	食料エネルギーシステ ム科学専攻	5	10	-	40	博士(工学) 博士(農学) 博士(学術)	1.10	平成27年度	
【連合農学研究科】 (博士課程)		45		135		0.98		〒183-8509 東京都府中市幸町 三丁目5番8号	
生物生産科学専攻	3	15	-	45	博士(農学) 博士(学術)	1.19	平成19年度		
応用生命科学専攻	3	10	-	30	博士(農学) 博士(学術)	0.36	平成19年度		
環境資源共生科学専攻	3	10	-	30	博士(農学) 博士(学術)	0.96	平成19年度		
農業環境工学専攻	3	4	-	12	博士(農学) 博士(学術)	1.75	平成19年度		
農林共生社会科学専攻	3	6	-	18	博士(農学) 博士(学術)	1.00	平成19年度		
【農学部】		300		1,270		1.08		〒183-8509 東京都府中市幸町 三丁目5番8号	
生物生産学科	4	57	-	228	学士(農学)	1.05	平成16年度		
応用生物科学科	4	71	-	284	学士(農学)	1.09	平成16年度		

平成27年度より
募集停止

平成27年度より
募集停止

環境資源科学科	4	61	-	244	学士（農学）	1.03	平成16年度	平成24年度より 募集停止
地域生態システム学科	4	76	-	304	学士（農学）	1.05	平成16年度	
共同獣医学科	6	35	-	210	学士（獣医学）	1.11	平成24年度	
獣医学科	-	-	-	-	学士（獣医学）	-	-	
【工学部】		521	3年次 70	2,224		1.04		〒184-8588 東京都小金井市中 町二丁目24番16号
生命工学科	4	77	11	330	学士（工学）	1.03	平成16年度	
応用分子化学科	4	46	5	194	学士（工学）	1.02	平成16年度	
有機材料化学科	4	41	5	174	学士（工学）	1.08	平成16年度	
化学システム工学科	4	35	5	150	学士（工学）	1.02	平成16年度	
機械システム工学科	4	116	16	496	学士（工学）	1.06	平成16年度	
物理システム工学科	4	56	-	224	学士（工学）	1.06	平成16年度	
電気電子工学科	4	88	20	392	学士（工学）	1.02	平成16年度	
情報工学科	4	62	8	264	学士（工学）	1.03	平成16年度	
附属施設の概要	<p>名称：教員評価機構</p> <p>目的：教員の教育・研究力の厳格かつ適正な評価を行い、教員が教育・研究力の強みを伸ばし、弱みを克服するための指針を示すことで、全学的な教育・研究水準の向上を図ることを目的とする。</p> <p>所在地：東京都府中市晴見町三丁目8番1号</p> <p>設置年月：平成25年4月</p> <p>規模等：建物212㎡</p> <p>名称：学位審査機構</p> <p>目的：学位の授与に関し、その質を保証することを目的とする。</p> <p>所在地：東京都府中市幸町三丁目5番8号</p> <p>設置年月：平成26年4月</p> <p>規模等：建物189㎡</p> <p>名称：グローバル教育院</p> <p>目的：国際教育交流に関する全学的事業の推進及び支援、教養教育の企画及び実施、入試戦略及び支援、その他全学に係る教育に関する業務を実施するための組織として、東京農工大学での教育活動を通して、農学又は工学の専門性を持ち、教養豊かで国際社会において活躍できる人材を育成することを目的とする</p> <p>所在地：東京都府中市幸町三丁目5番8号、東京都小金井市中町二丁目24番16号</p> <p>設置年月：平成30年4月</p> <p>規模等：建物1,471㎡</p> <p>名称：図書館</p> <p>目的：図書の貸出、文献複写等のサービスの提供により、重要な学術情報基盤として大学の教育研究活動を支援することを目的とする。</p> <p>所在地：府中図書館・東京都府中市幸町三丁目5番8号 小金井図書館・東京都小金井市中町二丁目24番16号</p> <p>設置年月：昭和24年4月</p> <p>規模等：府中図書館：建物3,428㎡、小金井図書館：建物3,479㎡</p> <p>名称：先端産学連携研究推進センター</p>							

目的：大学の研究理念を実現するため、研究戦略の立案及び研究内容を理解しつつ研究マネジメント、研究資金調達、知財管理及び活用を行うことにより研究者を支援することを目的とする。

所在地：東京都小金井市中町二丁目24番16号

設置年月：平成25年4月

規模等：建物4,537㎡

名称：保健管理センター

目的：大学の学生、役員及び職員の保健管理に関する専門的業務を遂行することを目的とする。

所在地：東京都府中市晴見町三丁目8番1号・東京都小金井市中町二丁目24番16号

設置年月：平成12年4月

規模等：建物526㎡

名称：総合情報メディアセンター

目的：大学における情報処理設備及び情報ネットワークを一元的かつ効率的に運用し、本学における先端科学技術研究、情報処理基礎教育、学術情報サービス、高速度情報通信及び事務処理に必要な高度情報処理機能を提供し、もって教育研究の進展に資することを目的とする。

所在地：東京都小金井市中町二丁目24番16号

設置年月：平成14年4月

規模等：建物1,629㎡

名称：学術研究支援総合センター

目的：学術研究の総合的な推進支援機能の整備・充実を図り、各種大型機器等の基盤的設備の計画的かつ集中的管理・共同利用、遺伝子組換え実験・遺伝子組換え生物等の使用等により生ずる生物多様性影響の防止に関する安全管理及び分析技術・遺伝子ゲノム科学技術の研究開発等を行い、もって教育研究の進展に資することを目的とする。

所在地：遺伝子実験施設・東京都府中市幸町三丁目5番8号

機器分析施設・東京都小金井市中町二丁目24番16号

設置年月：平成20年4月

規模等：遺伝子実験施設・建物1,640㎡ 機器分析施設・524㎡

名称：科学博物館

目的：教育研究分野及びその他科学の分野に関する資料の収集、保管、展示、公開及び調査研究並びに学芸員課程の運営を行うとともに、本学の教育研究活動及び社会貢献活動に寄与することを目的とする。

所在地：東京都小金井市中町二丁目24番16号

設置年月：平成20年4月

規模等：建物3,008㎡

名称：環境安全管理センター

目的：環境安全衛生活動を円滑かつ確実に推進するため、環境安全衛生にかかる業務を集約し、また、指示、命令及び情報伝達を明確にすることにより、本学における環境安全レベルの向上に資することを目的とする。

所在地：東京都府中市晴見町三丁目8番1号

設置年月：平成20年4月

規模等：建物212㎡

名称：放射線研究室

目的：放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律第3条の規定に基づき、使用の許可を受けた本学の農学部事業所及び工学部事業所について、本学の教育研究施設としての役割を果たし、もって放射性同位元素等を使用して行う教育研究を支援することを目的とする。

所在地：東京都小金井市中町二丁目24番16号

設置年月：平成20年4月

規模等：建物307㎡

名称：グローバルイノベーション研究院女性未来育成機構

目的：男女共同参画推進室及び関係部局の協力の下、全学的な視点から女性研究者が活躍できる環境整備等を推進するとともに、女性の視点に基づいた安全・安心・健康に貢献する先端的プロジェクト研究を推進し、もって本学の教育研究活動の進展に資することを目的とする。

所在地：東京都府中市幸町三丁目5番8号

設置年月：平成28年4月

規模等：建物17㎡

名称：グローバルイノベーション研究院イノベーション推進機構

目的：全学的な視点から国際社会に新たな価値を創造・提案し、その価値を社会に定着させることができる実践力を持ったイノベーション人材の育成を行い、もって本学の教育研究活動の進展に資することを目的とする。

所在地：東京都府中市晴見町三丁目8番1号

設置年月：平成28年4月

規模等：建物199㎡

名称：グローバルイノベーション研究院テニユアトラック推進機構

目的：全学的な視点から若手研究者が自立して研究できる環境の整備を促進するため、テニユアトラック制度の推進を図ることを目的とする。

所在地：東京都府中市晴見町三丁目8番1号

設置年月：平成28年4月

規模等：建物199㎡

名称：環境リーダー育成センター

目的：国際的な視野を持ち広くアジア・アフリカ地域の環境問題の解決に貢献し得る環境リーダー人材を育成することを目的とする。

所在地：東京都府中市幸町三丁目5番8号

設置年月：平成21年4月

規模等：建物189㎡

名称：農学部附属広域都市圏フィールドサイエンス教育研究センター

目的：自然林、二次林、農地、都市緑地などの多様なフィールドを有機的に結びつけ、環境科学、生物生産科学、森林科学、生態学、獣医学など広い視野と手法の融合によって、食料・資源問題の解決、資源循環型社会の構築を図るための教育・研究を推進する。

所在地：(フィールドミュージアム府中)東京都府中市幸町三丁目5番8号

(フィールドミュージアム本町)東京都府中市本町三丁目7番7号

(フィールドミュージアム津久井)神奈川県相模原市緑区長竹志田口3657番地1

(フィールドミュージアム多摩丘陵)東京都八王子市堀之内1528

(フィールドミュージアム草木)群馬県みどり市東町草木1582

(フィールドミュージアム大谷山)群馬県みどり市東町神戸277

(フィールドミュージアム唐沢山)栃木県佐野市栃本町1

(フィールドミュージアム秩父)埼玉県秩父市大滝瀬平1840番地2

設置年月：平成12年4月

規模等：土地9,433,008㎡、建物11,563㎡

名称：農学部附属動物医療センター

目的：東京農工大学農学部附属動物病院として、学生に対する獣医学教育の場として、大学の研究としての場として設立され、多摩地域の獣医学としての高度医療を担う病院として位置づけられている。

所在地：東京都府中市幸町三丁目5番8号

設置年月：平成20年7月

規模等：建物2,601㎡

名称：農学部附属硬蛋白質利用研究施設

目的：皮革産業と革製品産業全体に対して学術的、技術的支援、ならびに人材育成に寄与しうる研究・教育を行うと共に、原料皮が畜産と肉生産の副産物として重要な資源であるという見地に立って、その主成分である皮（硬）タンパク質資源の総合的高度利用をめざす研究・教育を行うと共に、硬タンパク質の構造と機能の解析を通じて新しい生体系材料の開発と生物機能の解明およびこれらの利用に寄与する研究教育を行う。

所在地：東京都府中市幸町三丁目5番8号

設置年月：昭和51年4月

規模等：建物815㎡

名称：農学部附属フロンティア農学教育研究センター

目的：フロンティア農学の研究展開とそれからの学部教育及び大学院教育への活用を促進することを目的とする。

所在地：東京都府中市幸町三丁目5番8号

設置年月：平成20年7月

規模等：建物867㎡

名称：農学部附属国際家畜感染症防疫研究教育センター

目的：感染症の原因ウイルスや細菌等の感染ルートの解明などの防疫に関する研究及び経済的な側面からの感染症対策に関する研究機能を持ち、さらに国際的視野に立って、日本国内及び海外における口蹄疫等の家畜感染症防疫研究教育を行うことを目的とする。

所在地：東京都府中市幸町三丁目5番8号

設置年月：平成23年4月

規模等：建物142㎡

名称：工学部附属ものづくり創造工学センター

目的：学生がものづくりに関する実験・実習を行う場であり、研究活動に必要な装置の製作について協力と支援を行う施設として、学内の研究教育活動を支える基礎的役割を担う。

所在地：東京都小金井市中町二丁目24番16号

設置年月：平成19年4月

規模等：建物750㎡

教育課程等の概要(事前伺い)

(農学府 農学専攻)

科目区分	授業科目の名称	配当 年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
	小計(14科目)	—		24		—			10	12	2	1		兼10
応用生命化学コース	生体分子化学Ⅰ	1・2①		2		○			1	3				オムニバス
	生体分子化学Ⅱ	1・2③		2		○			2	1				オムニバス
	生理生化学Ⅰ	1・2①		2		○			2	1		1		オムニバス
	生理生化学Ⅱ	1・2③		2		○			3	1				オムニバス
	健康長寿科学Ⅰ	1・2①		2		○								兼8 オムニバス
	健康長寿科学Ⅱ	1・2③		2		○								兼8 オムニバス
	応用生命化学特論Ⅰ	1・2①		1		○								兼2 オムニバス・隔年
	応用生命化学特論Ⅱ	1・2①		1		○								兼1 隔年
	応用生命化学特論Ⅲ	1・2③		1		○								兼1 隔年
	応用生命化学特論Ⅳ	1・2③		1		○								兼1 隔年
	応用生命化学特論Ⅴ	1・2③		1		○								兼1 隔年
	応用生命化学特論Ⅵ	1・2②		1		○								兼2 オムニバス・隔年
	小計(12科目)	—		18		—			8	6		1		兼21
自然環境資源コース	環境資源材料学Ⅰ	1・2①		2		○			1	1				隔年
	環境資源材料学Ⅱ	1・2③		2		○			1		1			隔年
	資源機能制御学Ⅰ	1・2①		2		○				3				隔年
	資源機能制御学Ⅱ	1・2③		2		○			2					隔年
	環境生物学Ⅰ	1・2①		2		○			1	3				
	環境生物学Ⅱ	1・2③		2		○			1	3				
	環境化学Ⅰ	1・2①		2		○			2	1				
	環境化学Ⅱ	1・2③		2		○			3	1				
	生態系保全学Ⅰ	1・2①		2		○				2				
	生態系保全学Ⅱ	1・2③		2		○			1	3				
	生態系保全学Ⅲ	1・2②		2		○				1				
	森林環境保全学Ⅰ	1・2①		2		○			1	2				
	森林環境保全学Ⅱ	1・2③		2		○			1	2	1			
	森林環境保全学Ⅲ	1・2②		2		○				1	1			
	自然環境資源学特論Ⅰ	1・2②		2		○								兼2 オムニバス・集中
	自然環境資源学特論Ⅱ	1・2④		2		○								兼2 オムニバス・集中
	自然環境資源学特論Ⅲ	1・2②		2		○								兼2 オムニバス・集中
	自然環境資源学特論Ⅳ	1・2④		2		○								兼2 オムニバス・集中
	自然環境資源学特論Ⅴ	1・2①		2		○								兼1 隔年
	自然環境資源学特論Ⅵ	1・2③		2		○								兼1 隔年
自然環境資源学特論Ⅶ	1・2①		2		○								兼1 隔年	
自然環境資源学特論Ⅷ	1・2③		2		○								兼1 隔年	
自然環境資源学特論Ⅸ	1・2②		2		○								兼2 オムニバス	
自然環境資源学特論Ⅹ	1・2④		2		○								兼2 オムニバス	
	小計(24科目)	—		48		—			12	20	3			兼16
食農情報工学コース	地域環境工学Ⅰ	1・2①		2		○			1					
	地域環境工学Ⅱ	1・2③		2		○				1				
	地域環境工学Ⅲ	1・2①		2		○						1		
	生物生産工学Ⅰ	1・2③		2		○				1	1			オムニバス
	生物生産工学Ⅱ	1・2①		2		○			1	1				オムニバス
	生物生産工学Ⅲ	1・2③		2		○			1					
	食農情報工学特論Ⅰ	1・2①		2		○								兼4 オムニバス
	小計(7科目)	—		14		—			3	3	1	1		兼4
地球社会学	共生人間学Ⅰ	1・2①		2		○				2	1			
	共生人間学Ⅱ	1・2③		2		○			1		1			
	環境社会関係学Ⅰ	1・2①		2		○				2				
	環境社会関係学Ⅱ	1・2③		2		○			1	1				
	食料環境経済学Ⅰ	1・2①		2		○			1		1			

教育課程等の概要(事前伺い)

(農学府 農学専攻)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
農学専攻	コース	食料環境経済学Ⅱ	1・2③	2		○			1		1				オムニバス	
		食料環境経済学Ⅲ	1・2③	2		○			1			1			オムニバス	
		地球社会学特論Ⅰ	1・2①	2		○									兼3 オムニバス	
		小計(8科目)	—	16		—			5	5	4	1			兼3	
	国際イノベーション農学コース	国際環境修復保全学Ⅰ	1・2①	2		○			1						オムニバス オムニバス オムニバス	
		国際環境修復保全学Ⅱ	1・2③	2		○			1	1						
		国際生物生産資源学Ⅰ	1・2①	2		○				1						
		国際生物生産資源学Ⅱ	1・2③	2		○				1						
		国際応用生命化学Ⅰ	1・2①	2		○			3	1						
		国際応用生命化学Ⅱ	1・2③	2		○			1	3						
		国際地域開発学Ⅰ	1・2①	2		○				1						
		国際地域開発学Ⅱ	1・2③	2		○			1							
		国際応用動物学Ⅰ	1・2①	2		○			5	7	1					オムニバス
		国際応用動物学Ⅱ	1・2③	2		○			4	6	3					オムニバス
国際イノベーション農学特論Ⅰ	1・2①	2		○									兼1			
小計(11科目)	—	22		—			16	21	4				兼1			
論文関連科目	A 特別研究	農学特別研究Ⅰ	1・2通	4				○	53	66	12					
		農学特別研究Ⅱ	1・2通	1				○	53	66	12					
		農学展開研究Ⅰ	1・2通	1				○	53	66	12					
		農学展開研究Ⅱ	1・2通	1				○	53	66	12					
	B 特別研究	農学特別研究Ⅲ	1・2通	4				○	53	66	12					
		農学特別研究Ⅳ	1・2通	1				○	53	66	12					
		農学展開研究Ⅲ	1・2通	1				○	53	66	12					
		農学展開研究Ⅳ	1・2通	1				○	53	66	12					
	特別演習	農学特別演習Ⅰ	1・2通	4			○		53	66	12					
		農学特別演習Ⅱ	1・2通	4			○		53	66	12					
		論文レビュー特別演習Ⅰ	1通	2			○		53	66	12					
		論文レビュー特別演習Ⅱ	1通	2			○		53	66	12					
小計(12科目)	—	26		—			53	66	12							
合計(124科目)	—	—	1	213		—		53	66	15	7		兼76	—		
学位又は称号	修士(農学)、修士(学術)	学位又は学科の分野			農学関係											

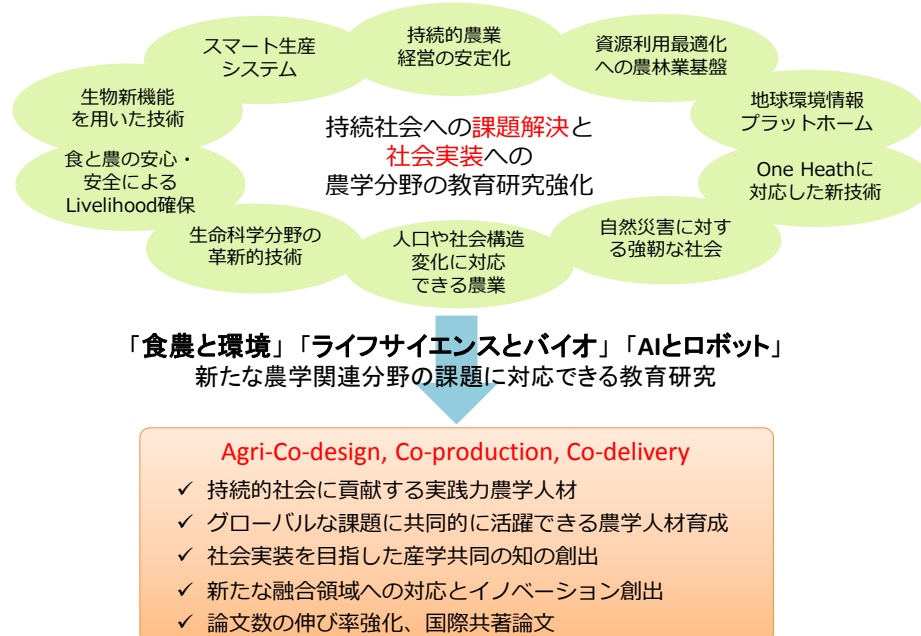
I. 設置の趣旨と必要性

1. 東京農工大大学院農学府の改組が目指すもの

(1) 改組の趣旨

近年、集約的な農業生産の拡大による水・土などの農業を支える基盤資源の劣化、地球温暖化による極端気象や土砂災害などの環境変化、人口減少による農村社会基盤の変化、世界的な食料需給の逼迫などを背景にして、気象変動や自然災害に対してレジリエンスの高い持続可能な農業生産システムの構築や新たな生物新機能の探索の必要性が高まってきている。我が国においても、新興国の農業生産変動リスクの増大や農産物需要の恒常的拡大、TPPなどの農産物自由化の進展などに直面するなか、国内農業の維持・発展には国際競争力の強化が喫緊の課題になっている。国際競争力の強化には多様な消費者ニーズに対応し高付加価値を創出できる農業に向けた改革と実践が不可欠であり、これまでの伝統的な農業生産技術や農産物流通の革新、すなわち農業のイノベーションが求められている。また、食と農は、豊かな食生活や文化、家族や地域のあり方と密接に関連しており、地域や生活に密着した農業システムの再構築も重要となる。

これらに加えて、国内のみならずアジア・アフリカ・中南米地域を中心とした、グローバルな農業や環境に関する諸課題の解決に向けた国際連携・協力が益々、重要になってきている。特に、「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals: SDGs)」の多



専門力を深化させながらも、農学としての総合力(俯瞰力)と各専門のつながりを理解する力をもつ専門職業人や高度人材の必要性

図-1 改組の方向性と理念

くの分野が農業や地域開発と関連しており、農業や環境に関する地球規模的課題の解決に向けて多面的観点から対策を立案・実行することが求められている（図-1）。

このような農業を取り巻く社会的な流れの中で、国内的には 2050 年への人口減少社会、世界的には人口 90 億人の時代に向けて、国際的な視野をもち日本と世界各地への橋渡しとなり、農業を基礎とした安心・安全な、社会-生態システムの維持、食と農の一体化による地域社会やそれらの持続的発展を進めるための専門家育成が必要である。高度な専門職業人やさらなる研究人材を育成する大学院では、既往の知識体系と個々の専門性のみならず、生産、環境、食料、健康、社会などの諸分野の横断的な視野をもち、他分野の人々や組織と連携し、新しい課題に向けて解決策を見だし、次世代の農業社会基盤、持続的な資源管理、生物新機能の探索などを実践的に先導し、国内外で活躍できる国際通用性のある人材の育成が必要となる。

本学では、蚕学、植物防疫学、農芸化学、環境科学、林学、農業工学、農業経済学、農政学、獣医学などの「伝統的な農学」を重視しながらも、農山村の生産基盤環境の修復及び保全技術と、持続可能でありながら食料・素材の質と量の向上に貢献する持続的次世代型生産技術、ゲノムやバイオテクノロジーなどのオミックス技術を用いた生物新機能の探索、これらの実装に必要な政治経済や社会文化分野における学究など、常にあらたな領域を取り入れながら教育研究が行われてきた。これらの教育研究資源を基盤に、国内外の多様な連携、首都圏と地域の連携、アジア・アフリカ・中南米との連携を行ってきた大学として、さらなる実践的グローバル専門教育を行うとともに、次世代農学に向けたイノベーション創出に貢献できる課題解決型の技術/研究人材の育成を目指している。そのためには、専門的な先端研究教育活動に加え、複数領域を俯瞰し、多次元的な思考と実務を実践すること、課題探求力を養うこと、社会性・公益性を広く認識することなどが必要である。すなわち自然科学探究から展開するフィロソフィーを基軸として、多面的な事象の掌握から、課題の取組・完遂へと水平展開できる、高度なマネジメント能力を身につけた実力ある人材の養成が急務であると考える。また、意欲、能力の高い学生が、実社会等との接点を持つ機会を積極的に創出することで、有望な人材の活用について社会的な認識を広めることも極めて重要な課題であると強く認識している。

本改組では、これまでの強みや特色を最大限に活用し、学位プログラム制を導入し、これまでの 9 専攻から「農学専攻」の 1 専攻へと改組し、将来的な教育ニーズの変化、学際的な教育の実施など柔軟な大学院教育を実施することを目的とする。本改組により、農学府は「農学専攻」と「共同獣医学専攻」の 2 専攻体制となる。柔軟な教育研究体制を強化するために、それを実装する組織体制として、学生教育組織である農学府と、教員組織である農学研究院を切り離し、コースによる学生の学籍管理と学位プログラムの実施による教育の質の保証を行うことで、従来の専攻の枠にとらわれない融合型教育を取り組む環境を整備する。これにより、従来、国際環境農学専攻が担ってきた留学生教

育を、農学府全体のグローバル化に発展させ、多様な分野の積極的な留学生の受け入れ、国際共同研究を通じた教育の実施により国際舞台で活躍できる次世代農学の研究者や技術者の養成を進める。

2. 東京農工大学大学院農学府に対する要請

(1) ミッション再定義と改組

東京農工大学は、世界の平和と、社会や自然環境と調和した科学技術の進展に貢献し、農学、生命科学、環境科学、獣医学分野における諸課題解決とその実現を担う人材の育成と知の創造に邁進することを理念として、農工連携の教育研究および社会貢献に取り組んでいる。法人化以降、テニュアトラック制度の積極的な導入や女性研究者支援制度の拡充などの教育研究人材の充実を図るとともに、教育力と研究力の強化に取り組んできた。また、グリーン・クリーン食料生産を支える実践科学リーディング大学院プログラム、アジア・アフリカ現場立脚型環境リーダー育成プログラム、アグロイノベーション高度人材養成プロジェクトなどの特色のある教育を進めてきた実績を積み上げてきた。これらの実績を踏まえながら、国際的視野での教育研究力強化を進めるために、社会的ニーズを踏まえて、大学院の教育体制を再編成し、ローカルからグローバルの課題に対応できる農学系人材の育成を進める。課題解決とその実現はイノベーションの重要要素と位置づけられるが、これは大学と社会や地域との単なる連携活動によって実現できるものではなく、その実践には、個人の意識を改革し、社会との関連性を視野に入れながらも高い専門性を持ち合わせた高度な思考、計画と実践力が必要となる。また、他分野の人々や社会との連携が必須であるため、幅広い人間関係の構築と未来的な視野をもった活動を行えることが重要である。さらには、教育環境ならびに教育を実施する大学の教員もイノベーションに対する高い目的意識と、その実践のための方法論を明確に理解する必要がある。特にイノベーション創出を持続的に実現するため、農学とその融合領域の高度専門性を有する学生に、他の専門領域や知的財産等に関する研修・教育を実施し、それらの人材を研究開発に事業化戦略や知財戦略を組み込めるようなクロスボーダー型の人材として養成することが喫緊の課題である。

従来、農学府は9専攻で構成されていたが、本改組により1専攻とし、クロスボーダー型、すなわち、専攻の枠組みを越えた分野横断型の教育研究指導を実施する。教員の人的資源を有効活用するため、学生・教員一体となって、各コースの専門性とその周辺・間隙に存在する学際領域をカバーできる体制をとる。それを実現可能とするカリキュラムとして、「21世紀農学特論」や「国際研究プレゼンテーション演習」などを必修とした。「国際研究プレゼンテーション演習」では、専門の枠組みを超えて、各学生が研究目的や概要を説明、全教員の参加による、質疑応答を行う。「21世紀農学特論」では、知財管理の概要のほか、オムニバス形式で各コースの学際農学研究を実践している若手教員により、農学専攻の魅力を理解させる。さらに、他の専門領域の幅広い知識や研究手法

を習得することを目的とし、異なる研究室で 1～2 単位分の修士論文に関する研究を行う、研究室ローテーションを導入する。これらの教育研究を通じ、個々の学生に、農学専攻における専門性からの各自の立ち位置を把握させ、その後のより深い専門性研究につなげる。各講義・演習においては、アクティブラーニングの手法も導入し、”主体的・対話的で深い学び”を通じて、主体的かつ能動的に自らの役割を担い、世界や社会の困難や矛盾を解決できる人材を養成する。

本改組では、国際イノベーション農学コースを除く 5 コースの構成は本学の連合農学研究科の専攻の枠組みに対応しており、研究をより深化させる博士課程へのシームレスな教育研究を可能とし、より高度な専門性をもつ多様な博士プログラムと連動した修士プログラムを構築する。国際イノベーション農学コースでは、クロスボーダー型人材から、専門性を高める博士課程への進学が可能となる。農学専攻全体としては、連合農学研究科のみならず、共同獣医学専攻や文理融合型博士人材育成など、養成人材の専門性を考慮した多様博士課程への接続が可能としている。

また高度な専門教育の観点では、国際的に秀でた研究を推進するために、卓越した位置づけにあるイネ新品種開発などの食糧科学、応用生物化学分野におけるゲノム情報解析、エアロゾルや海洋プラスチックの動態解析、野生動物管理などの環境科学をはじめとする農学や森林科学分野における高い国際評価を生かしつつ、IoT など食農情報分野や農工融合による先端研究を推進し、我が国の農学分野の発展と人材育成に寄与する。また、アジア・アフリカ地域、中南米などの農業や環境の諸問題が発生している赤道を帯とする地域における国際協力機構実績や ASEAN 諸国を中心とした国際的學生交流事業である「AIMS プログラム」や「La-CEP プログラム」、さらには「JDS プログラム」など生かし、学生・研究者による国際共同研究・交流・貢献を加速化し、国際共著論文などで農学分野の研究を先導していく。

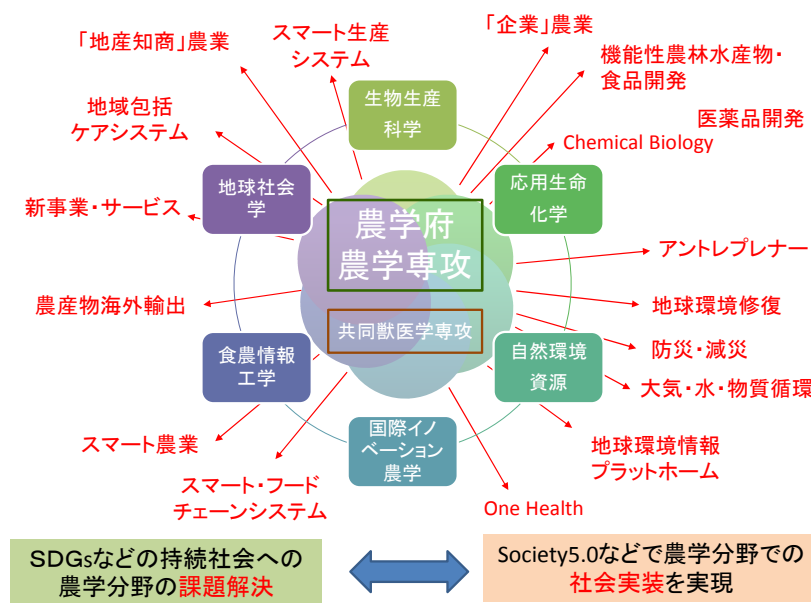
(2) 社会や産業界からの要請

本学では、持続発展可能な社会を実現するために、学術的・社会的に貢献度が高く、質の高い教育研究を行うことを目標にしており、本改組では、本学の従来からの強力な産学連携体制を維持・発展させるとともに、基礎研究と応用研究をあわせて推進していく。今後も農業分野の成長を支える実践的な研究を一層推進するため、イノベーションを生み出す Agri-Co-design, Co-production, Co-delivery による大学院教育を進める。とくに、農学、生命科学、環境科学、獣医学分野において、卓越した専門的な知識や技術を習得するのみならず、多様な農業や環境の課題、次世代の新しい研究の芽を醸成するために、横断的・俯瞰的な知識を授け、得られた知見を水平展開できるような教養豊かで国際社会でも指導的な役割を担える高度な専門職業人等の育成を進める。変動する環境や社会に対応できる農業・環境の知見を習得するために、積極的に社会人との学びの場を設け、現場での課題とその解決方法を学ぶ。産学の連携を通して大学と社会が、

ともに利益を得る体制を構築し知的創造サイクルを形成することを目指している。すなわち、教育体系の整備は学術の進展をもたらすとともに、社会とのつながりによる「学術研究」の貢献へ結びつけることができる。

また、多摩地区に位置する本学は、東京の農林水産業の中心であり、都民の台所と密接に結びついている。そのため、多様な需要をまかなうため、食生活の維持、安心安全でかつ健康的な食生活に大きな役割を果たしている。農地は、農業生産のみならず、緑地空間、防災面も重要な役割を果たし、水源かん養、国土の保全、生活環境の保持などの公益的な役割をあわせもっている。さらに、東京農工大学大学院農学府は、首都圏にある農学分野として、都市と地方をつなぐ役割を担っている。人口減少化社会における農村社会基盤の維持管理など、スマート農業の実践の現場としても、地域の課題を把握することで、現場立脚型の課題解決の教育研究を実践し、次世代農学人材を育成することが求められている。

近年、多くの外国人が日本を訪れるようになり、東京の魅力のみならず、日本の農村の良さが再認識されている。その中で、新たな価値としての、日本の農村や農業技術、地域資源管理技術などへの理解として波及することで、東京農工大学をハブとした国際的な農学教育研究拠点が形成されると考えられる。



図ー2 農学専攻のフレームワーク

3. 改組の必要性、方向性及び効果

東京農工大学大学院農学府は、現在の9専攻体制になり、20年が経過し、農学府全体として新たな社会ニーズに対応した人材育成を目指した、基礎的かつ専門的な農学教育

の実施の必要性に迫られている。これまで農学府では、生物生産科学、共生持続社会学、応用生命化学、生物制御科学、環境資源物質科学、物質循環環境科学、自然環境保全学、農業環境工学、国際環境農学の9本柱で、広範囲の農学に関する教育研究を実践してきた。これらの基盤をもとに、より柔軟な教育組織を体系化するため、教員組織である農学研究院と教育組織である農学府を明確に分け、より柔軟な学位プログラムを実施できる6コースに改組する。

これにより、伝統的な農学の知識や技術的な体系を習得するのみならず、人々の生活や地域づくりの視点、食から健康までの幅広い農学分野をも網羅しつつ、国際舞台で活躍できる人材を養成する（図-2）。とくに、国内外のフィールドにおいて現場に立脚した課題解決を実践で人材の育成として、「専門性」とともに、専門分野間の関連を考慮できる「横断的な視野」、さらには自身の専門を農学分野全体の中に位置づける「俯瞰的視野」を習得した人材を育成する。従来の特攻で培われてきた専門的な人材育成のよさを堅持しつつ、特攻の枠を越えた大学院教育実施体制へと変革するものである。

(1) 改組の理念と概要

①改組の理念と養成する人材像

本改組では、農学とその関連分野（工学や人文・社会科学など）における専門に立脚した高度な知識と技術を持ち、国内外の諸課題を解決するために専門分野を超えた持続的社会的社会創成へ向けての幅広い知識に基づく俯瞰的な思考力を身につけ、深い学識と研究能力により、国内外のさまざまな現場における課題解決型技術者として活躍できる国際通用性のある人材、もしくは基礎的科学技術推進力を備えた博士課程への高度人材としての素地を養成する。

これらの教育目標を達成するために、以下の能力と素養を身につけさせる。

1. 持続的社会に必要な人口・食料・資源・環境問題の解決に不可欠である、食糧・健康・生命機能・生物資源・資源管理・情報・農村社会基盤などの農林学や生命科学に関する高度専門知識と技術力
2. 個々の専門領域において個別の専門性を身につけながら、社会の持続的発展のための貢献を使命とし、自然と人間および社会と分野に関して深い理解と洞察をなす、俯瞰的視野を持ち国際人として活躍できる素養と教養
3. 課題探求能力を持ち、社会要請にこたえて、科学的手法を駆使しつつ、現場に立脚した問題解決を図る能力の養成しつつ、研究倫理を尊び、自ら研究・調査した結果を報文や論文としてまとめ、学会や国際会議などで発表できる能力
4. 豊かなコミュニケーション能力を備え、諸外国の歴史や文化を理解し、専門性と学際性を両立させながら、国際社会において指導的立場で活躍できる能力

上記の人材育成のために、従来の農学府を9専攻体制から1専攻とする。専攻内には、6コースを配置し、専門教育を発展させるとともに、コース間の教育研究を連携させ、

専門を越えた教員からの指導も受けることにより、横断的・俯瞰的な視点を育成、新たな教育研究シーズの醸成を進める（図-2と3）。このために、専門的な指導教員と副指導教員からなる、修士課程審査委員会を強化する。

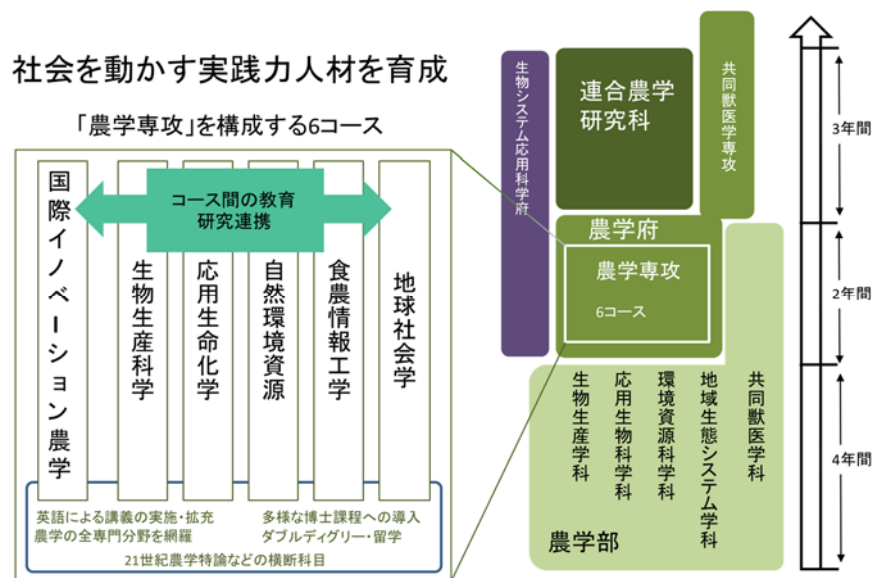


図-3 改組後の教育体制

次世代農学人材育成を目的とし、農学及び関連諸分野の国際的最先端成果について、農学研究院の各部門所属の教員のほか、工学研究院の各部門所属の教員および協力教員で組織された多様な教育研究分野に関する講義と演習を行う。とくに、農学に関する高度な専門知識を習得、農学研究者の基礎的な素養を涵養するため、農学専攻内での横断型の共通国際農学科目を設定、未解明な課題へのアプローチの仕方、論理的思考法、先端的な知識と実験技術の学習から、イノベーションの創出と実践の基礎を身に付ける。また、主指導と副指導教員による修士論文の作成を通して実践的研究、グローバル基準での研究者や専門技術者としての倫理の定着等を行う。さらに、国際イノベーション農学コースでは、英語による講義や実習のみで習得できるものとし、多くの外国人学生を受け入れながらボーダーレスの国際的環境を構築し、イノベーションの牽引者としての教育を重点化する。この先進的な教育活動については、他コースへの波及、定着も推進し、その他のコースでは、英語による講義も中心とした講義・演習を通して、それぞれの高度な専門性に立脚した現場対応能力、社会における課題解決力を養成する。

②アドミッション・カリキュラム・ディプロマの各ポリシー

アドミッションポリシー

国際的な視野での農学分野でのリーダーを育成することを旨し、以下のような人材を求める。

- 農学分野に関する十分な基礎学力を有する者
- 研究や講義履修に必要な英語力とコミュニケーション能力を有する者
- 研究課題に積極的に取り組む意欲と探究心を持ち合わせている者
- 幅広い視野や興味に立脚した創造性豊かな研究や技術を展開する実行力に満ちた者

カリキュラムポリシー

農学府全体の国際的な教育研究の重点化を進め、世界的視野に立った研究者と技術者を養成し、国内外の農学領域を牽引するリーダーを育成するための「専門力」を養成するとともに、専門分野と周辺分野の関連性としての「つながり力」、さらには各自の専門性を幅広い農学分野の中で俯瞰的に位置づけることができる「俯瞰力」を養成する。

- 農学及び関連分野について、基礎的科目、専門科目、修士論文の一体的プログラムから、国際的にも未解明な課題へのアプローチの仕方、論理的思考法などの高度な専門知識を習得
- 研究者や専門技術者としての基礎的研究技術の涵養、研究倫理の定着、プレゼンテーションやコミュニケーション能力を養成
- 主指導と副指導教員の指導および横断型科目の履修により、専門分野と分野間のつながりを理解し、新たな知見を習得
- 目標実現に向かって、自らの洞察力で見出した課題について、計画し実行するとともに、課題設定から課題解決までを説明できる能力を養成

ディプロマポリシー

国内外の諸課題を解決できる人材として、以下の能力を備え、国際通用性のある課題解決型技術者としての人材、もしくは基礎的科学技術推進力を備えた博士課程への高度人材としての素地を養成する。

- 農学に関する科学的な論理体系の理解とその課題探求に必須となる基礎知識および応用力
- 社会の持続的発展のための貢献を使命とし、広い視野を持ち国際人として活躍できる素養と教養
- 研究倫理を尊び、自ら研究・調査した結果をとりまとめ、発表できる能力
- 農学関連諸分野において、英語によるコミュニケーションや議論の能力
- 高度な専門的能力とともに、広い視野と高い識見を持ち合わせ、課題解決を実践するリーダーシップ

③ 1 専攻 6 コース制

本改組では、大学院教育として専門分野における高度な論理と技術を含めるとともに、本学の強みである、「実践的な農学教育」と「世界の農業イノベーション」の取り組みを生かし、2050年に向けた、「強い一次産業としての農林業」を目指して、安心・安全な社会-生態システムの構築し、「農と食と健康」への科学的な知識や技術を身につけさせようとするものである。そのため、農学の原点に立ち返り、「農学専攻」とするとともに、

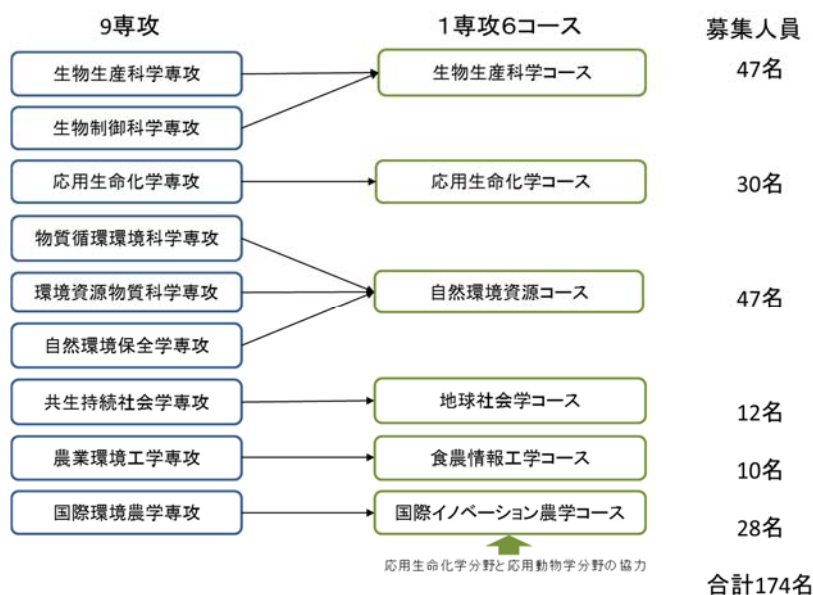


図-4 9専攻から1専攻6コース体制への改組

専攻内に、専門分野が容易に理解でき、かつ強みがわかるように、「生物生産科学」、「応用生命化学」、「自然環境資源」、「食農情報工学」、「地球社会学」、「国際イノベーション農学」の6つのコースを配置した(図-4)。各コースは、教育研究の柱となり入学時の学生の所属など学籍管理とともに、主指導教員による教育研究指導および学生生活全般の学生サポートを行う集合体となる。各コースの特徴は、生物生産科学コースでは、育種、生産、品質管理まで一貫し、食料生産の効率化と最適化を実践でき、安心・安全な食料生産を実現できる専門知識と技術を養成する。応用生命化学コースでは、食と健康を一体化し、社会や環境変化に対応できる生物新機能や創薬開発を実践でき、有用性生物機能の解明や技術開発の専門性を育成する。自然環境資源コースでは、変動環境下における水・土・生物・大気の諸現象を把握し、複雑な農林業の諸課題を総合的に解決できる知識と技術などレジリエントな社会構築に必要となる専門性を養成する。食農情報工学コースでは、食料の持続的生産と供給に向けた地域から地球規模での様々な課題解決のため、社会基盤の構築、生産技術の開発および食の安全に資する情報技術と専門性を農学・工学双方の観点から養成する。地球社会学コースでは、持続的農村社会や資源利用に必要となる、農業開発・市場・歴史・社会制度・合意形成などの農山村の諸課題

における文理双方の視点を意識しつつ理解し、社会や制度など対策方法等を検討できる専門性を養成する。国際イノベーション農学コースでは、農業や環境分野の課題に対して、言語や文化などの境界を越えて、自らファシリテータとなり議論を進めることができ、課題解決へのロードマップを構築・実践することができる専門知識と技術を養成する。

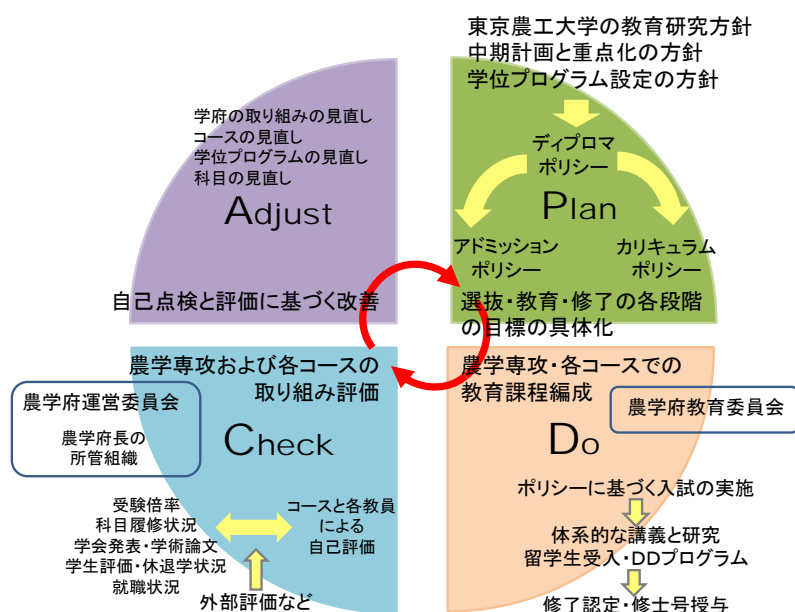


図-5 コース・学位プログラム制の質を担保する教学管理体制

本改組では、教員組織（農学研究院）と教育組織（農学府）を明確に分け、前述のコースによる学籍管理とともに、教育の質を保証する学位プログラムをコース内、あるいは将来的にはコース横断型として設置する。これにより、コース内およびコース横断型の複数の学位プログラムの実施、農工協同して一つの学位プログラムを構成するような柔軟なプログラム設定を可能とし、変化する社会ニーズに対応した農学の専門職業人育成を行う。本学では、これまでも、リーディング大学院での融合型カリキュラムの実施や、農学部地域生態システム学科内で実施中のプログラムなどの実績があり、今回の改組では、このような実績をふまえた上での修士課程への学位プログラム導入を行う。

学位プログラム制を導入しつつ、教育の質を担保する教学管理体制として、PDCA サイクルにて教育の計画・実施・評価を進める（図-5）。大学の中期目標や重点化の計画をもとに、農学専攻におけるディプロマポリシーを策定し、それをもとに、カリキュラムポリシーとアドミッションポリシーを策定する。これらの3ポリシーを元に、各コースにおける専門性と個別研究課題に対応した教育や人材像と、それに対する教育を計画する。各コースにおいて、ポリシーに基づく入試の実施、体系的な講義と研究、留学生受入やダブルディグリープログラムを実施する。評価においては、各教員およびコースの

自己点検とともに、入学試験・履修登録、科目履修状況、学会発表・学術論文、休学・退学状況、就職状況、さらには、学生授業アンケートなどの情報を基に評価し、農学府長所管の組織による評価を行う。これらの評価をもとに、新たな科目の立ち上げ、コース内に新たな学位プログラムの新設や統合なども検討する。

学生の各コースへの配属は、農学専攻の定員を従来と同じである 174 名としてコースごとに募集人員を設定（図－4）し、志願者が研究指導を希望する一のコースを選択し出願する。選抜試験はコースごとに実施、合格者を決定し、選抜に漏れた学生は、不合格となる。ただし、複数の受験機会を設けるため、12月に2次募集を行うこととする。

II 教育課程の特色

（1）教育課程の考え方

自ら考える力を養成し、専門性を高めるとともに、さまざまな専門分野が連携して、答えを探求できる能力の養成を目的として、伝統的な専門分野とともに、それらの分野を超えて幅広く学ぶことが可能となる教育課程を編成する。以下に、カリキュラムの特色をまとめる。

専門性と俯瞰性を醸成するカリキュラム

専門性とともに、俯瞰的かつ横断的な視野を育成することを目的とし、共通基礎科目のコース別の概論については、所属コースの概論のほかに、別コースの概論を履修することとする。とくに、ビッグデータを用いた解析などが期待される一方、それらを有効に解析できる技術、統計解析などの必要性も高く、フィールドや実験室での安全管理、研究倫理なども重要であり、これらの教育内容は、農学府の農学人材育成において共通的に必要となる内容であることから、共通科目や演習としての充実を図る。

主指導教員の下で修士論文に関する研究（「農学特別研究Ⅰ：4単位」および「農学特別演習Ⅰ：4単位」）を行う一方で、さらにその専門性を水平展開できるように、関連分野の副指導教員の下で、「農学展開研究Ⅰ：1単位」または「農学展開研究Ⅱ：1単位」あるいはその両方を実施する。修士論文の進捗状況を考慮の上、主指導・副指導の教員との話し合いで、研究室ローテーションを行う。

研究室ローテーションは、主指導教員の下で修士論文に関する研究を行っている学生が、1年次または2年次あるいはその両方の第3クォーターにおいて、副指導教員の下で週半日程度のゼミや実験実習を実施する。

次世代農学においては、課題と課題、地域と地域、専門と専門などの個々の要素をつなげていくことが出来る「つながり力」も重要であり、本学が力を入れている現場立脚型の教育において、それらはとくに重要である。問題解決においては、対象や現場での意見、さらにはそこで生じる課題を把握する視点が重要である。そのためには、各自の専門分野のみならず、学際的な視点が重要であり、「21世紀農学特論」では、分野横断・

俯瞰的な視野の先端研究を学び、農工大の特色である農と工の「つながり」を養成する、「農と工の科学概論」や、双方向のコミュニケーション能力を、「異文化コミュニケーション学」などで育成する。

国際先進的な教育研究の実践

国際的な舞台で活躍するイノベーションリーダーの育成には、大学院教育課程の早い段階からイノベーションマインドを醸成すると共に、大学院修了者が実際に活躍する機会を積極的に創出することが必要である。チームを形成し導く立場としての経験、すなわちキャリア開発や職業観についてファシリテータとしての役割を自らが担うことによって、研究のプロセスや現在の取組みの意味をより明確化する活動も重要である。さらには教員も広く当該活動に参画し、その成果を他コースや大学全体に波及することが目標の実現には必須である。

本改組では、従前の国際環境農学専攻を母体とした国際イノベーション農学コースを中心とした英語による講義を実施・拡充することで、留学生のみならず日本人学生の国際的な専門生を育成する。国際イノベーション農学コースには、農学研究院の多くの教員が教育を担当し、国内外の多様な農学ニーズに対応できる教育内容を確立すると共に、イノベーションリーダー育成の理念を他コースと共有、定着させることができる強い波及力を醸成する。また、本学では、世界の先進研究を実施している教員が多数来日し、研究やセミナーを開催しているため、この貴重な機会を大学院教育でも活用し、先端研究を学ぶ機会を多くつくる。このような修士論文としての先端研究の実践のみならず、研究に取り組む姿勢、実践的な論文執筆の技術なども学ぶ機会を作ることで、博士課程などへのさらなる高度人材の育成につなげていくことが大きな特色となる。

国際的な視点では、農学分野における知財の管理の重要度は増している。とくに、あらたな品種の育成や管理、データベースなど、国際基準での、さまざまな知財が発生する。そこで、国際化、多様化する知財管理について、専門の弁理士などの意見などを踏まえながら、学ぶ機会をつくる。また、国際的な教育の実践として、修士論文の評価としての、国際化も重要となる。本学では、ガ ज्याマダ大学やミラノ大学、カリフォルニア州立大学デービス校などのダブルディグリー関連科目を設定している。これらのダブルディグリープログラムにより、各国や現地で必要なる教育、国際共同研究における教育の実践など、留学を加速化し、現場立脚型の修士課程を実施することが可能となる。さらに、本改組によりミラノ大学とのダブルディグリープログラムの実施を可能とするのみではなく、将来的に欧米諸国でのダブルディグリーを可能とする、基本的なカリキュラム構成が可能となる。

国際的な舞台で活躍するイノベーションリーダーの育成を実現するために、国際イノベーション農学コースでは、下記のようなイノベーション人材教育を実施する。

- ・ 複合領域に跨がる広い専門分野の人材を統率できる国際的リーダーシップ養成

- ・社会や地域固有の課題提案と課題解決に向けたチーム作り
- ・チームワークを実践できるコミュニケーション力
- ・課題提案や課題解決を目指すことができる「学びの動機づけ」
- ・具体的な課題解決に向けた価値創造と社会に対する提案からイノベーションを推進できる能力

これらの教育には、当該課題に向けて新たな価値提案へと繋げることを後押しするファシリテータとしての役割も非常に重要となる。国際イノベーション農学コースでは、高い国際性とフラットな環境の中で、多様な価値観を尊重し、異なる専門性を相互理解しながら、自らファシリテータとなって議論を進めることにより、次の時代を切り拓くリーダーとなるための高度な教育の実現を目指す。

多面的な農学分野の教育と教育研究資源の有効活用

本改組により、農学専攻における多様な科目、国際的な農学人材育成に対して、限られる教育研究資源を有効に活用するように、研究組織である、「農学研究院」と「農学府」の組織を分け、柔軟な教育組織体制を確立する。将来的に減少すると予想される非常勤講師の予算配分を、農学専攻で有効に活用するため、共通基礎科目や共通演習科目を中心に、本学の教員でカバーしきれないものの、学生の教育において必要となる分野を中心に、講義を開講できるように進める。

(2) 教育課程の特色

科目群を含めた教育課程の概観については、下記の図に示した（図-6）。

【共通基礎科目】

高度専門職業人および博士課程への基礎的素養として、農学と工学や人文・社会科学などの関連分野の基礎を幅広く理解し、次世代農学を駆使した持続可能社会を構築するための基本的な知識を学ぶことができる科目群である。各コースの概論とともに、農工大の特色である、分野横断型の科目である「21世紀農学特論」を必修科目とし、「農と工の科学概論」や、双方向のコミュニケーション能力を、「異文化コミュニケーション学」、世界先進的な研究を多面的に学べる、本学グローバル研究院の外国人教員による、「Advanced lecture of Green, Food, and Life science」などで身につける。

【共通演習科目】

農学のその関連分野において、世界基準での基礎的素養である、フィールドやラボの安全管理、生命倫理・研究倫理・国際法規などを身につけるとともに、統計学などの基礎解析機能、地理情報システム（GIS）を用いた空間情報解析など実践的素養を醸成する。また、すべての教員が参加する、「国際研究プレゼンテーション演習」を必修科目として実施する。

【専門科目】

農学分野の課題解決に必要である伝統的な専門知識と技術を深めるとともに、最新の研究や知見に基づいた知見を習得する。

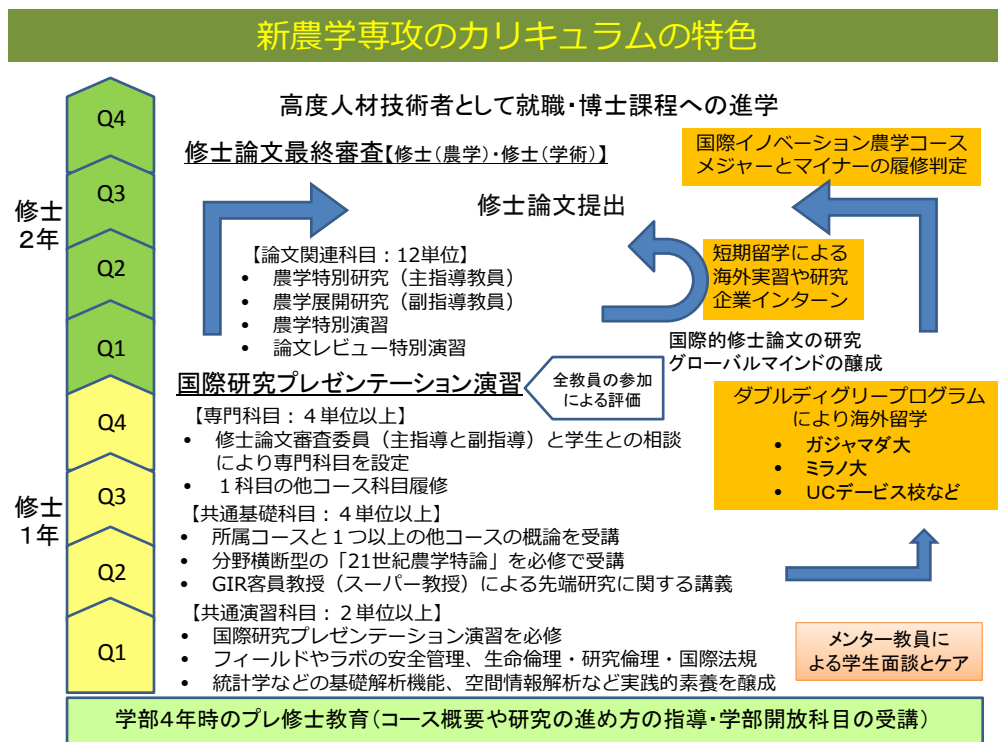


図-6 教育課程の概観

(3) 履修指導

農学専攻への進学者を対象として、入学前の前年度の第4クォーターに事前教育を実施し、農学における基礎および科目履修方法、研究の進め方などプレ大学院教育を実施する。希望者には、学部在籍時に大学院開講科目の履修を勧める。

大学院在籍の2年間では、【共通基礎科目】から共通基礎科目群の自コースの概論1単位、他コースの概論1単位および、「21世紀農学特論」を含めた4単位以上、【共通演習科目】から、「国際研究プレゼンテーション演習」1単位を含め2単位以上、【専門科目】から自コースの科目2単位、他コースの科目2単位を含め4単位以上、あわせて18単位以上を修得する。履修科目については、主指導と副指導教員が当該学生の専門性や将来の方向性を勘案しながら、研究に必要な知見の蓄積やインターンシップの実施などによる技術や知識の習得などを勧める。

【論文関連科目】からは、主指導教員による「農学特別研究Ⅰ（又はⅢ）（4単位）」をコアとして、主指導と副指導の連携の程度により、融合型の修士論文を実施する場合には、「農学展開研究Ⅰ（又はⅢ）」と「農学展開研究Ⅱ（又はⅣ）」のそれぞれ1単位を、修士論文を主指導と副指導の議論やセミナーなどで実施する場合は、「農学

特別研究Ⅱ（又はⅣ）」もしくは「農学展開研究Ⅰ（又はⅢ）」のそれぞれ1単位とする。さらに、「農学特別演習Ⅰ（又はⅡ）」の4単位と「論文レビュー特別演習Ⅰ（又はⅡ）」の2単位、あわせて12単位を修得する。共通基礎科目、共通演習科目、専門科目及び論文関連科目から合計30単位以上を修得する。

修士論文では、修士（農学）と修士（学術）を用意し、学位論文を提出してその審査に合格し、かつ、最終試験に合格することで、どちらかの修士号が付与される。修士（学術）を希望する場合は、主指導教員と研究内容について相談の上、「研究題目届」にその旨を明記する。また、「国際研究プレゼンテーション演習」において、複数の専門をもった教員が修士（学術）の妥当性について、研究の進捗状況を評価する。また、申請学位欄「修士（学術）」を授与するに当たり、複数の専門性をもった教員が審査に加わり、農学分野を超えて理学分野や人文・社会科学分野でも十分に通用性ある研究成果であり、修士（学術）を付記することが適当と判断した理由を主指導教員が明記するとともに、教授会において、この妥当性を審査する。

（4） 国際イノベーション農学コースにおけるダブルコース履修

国際イノベーション農学コースでは、高い国際性と分野横断型の教育研究環境の中で、多様な価値観を尊重し、異なる専門性を相互理解しながら、自らファシリテータとなって議論を進めることにより、次の時代を切り拓くリーダーとなるための高度な教育の実現を目指すことから、通常の履修要件を満たすプログラム（メジャープログラム）に加えて、他の5コースのプログラムの専門性を高めるマイナープログラム（マイナーコース）を用意する。マイナープログラムは、前述の教育課程のうち、【共通基礎科目】を2単位以上、【専門科目】を4単位以上について、当該の国際イノベーション農学コース以外のコース科目を履修し、さらに【修士論文科目】のうち「農学展開研究ⅠとⅡ（もしくはⅢとⅣ）」の2単位については、副指導教員が他のコースを担当していることが条件となる。メジャープログラムの履修要件（30単位）を満たしており、かつマイナープログラムの履修要件（8単位）を満たしている場合に、ダブルコースの修了が認定される。ダブルコースの実施では、主指導と副指導教員の強力な連携が重要であり、現状で指導体制や実施ノウハウの蓄積がある国際環境農学専攻を基礎とした国際イノベーション農学コースにおいて導入し、その後のPCDAサイクルによる評価を経ながら、段階的に農学専攻内の他のコースへの導入を検討する。農学専攻における履修モデルを下記に示す。

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
<p>必修科目 1 単位、共通基礎科目群の選択科目から 3 単位以上、共通演習科目群から 2 単位以上、専門科目群から 4 単位以上、論文関連科目群の選択科目から 1 2 単位、合計 3 0 単位以上修得し、かつ、学位論文を提出してその審査に合格し、最終試験に合格すること。</p> <p>ただし、修得条件として、共通基礎科目群から自コースの概論 1 単位と他コースの概論 1 単位を修得、共通演習科目群から国際研究プレゼンテーション演習 I 又は国際研究プレゼンテーション演習 II のうち 1 単位を修得、専門科目群から自コースの科目 2 単位と他コースの科目 2 単位を修得し、あわせて 1 8 単位以上を修得するとともに、論文関連科目群から特別研究科目群の A 又は B を選択し、A を選択した場合は農学特別研究 I、B を選択した場合は農学特別研究 III の 4 単位を含む 6 単位、特別演習科目群の農学特別演習 I 又は農学特別演習 II から 4 単位、論文レビュー特別演習 I 又は論文レビュー特別演習 II から 2 単位を修得すること。</p> <p>教職課程履修者においては、論文関連科目の特別研究の A と B の履修に当たって、理科の場合は A 群を、農業の場合は B 群から履修すること。</p>	1 学年の学期区分	4 学期
	1 学期の授業期間	第 1・3Q : 15 週 第 2・4Q : 8 週
	1 時限の授業時間	90 分

教育課程等の概要(事前伺い)

(農学府 生物生産科学専攻)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専攻共通科目	生物生産科学特論	1前	1			○			5	2						
	生物生産科学フロンティア講義Ⅰ	1・2前		0.5		○									兼1	隔年集中
	生物生産科学フロンティア講義Ⅱ	1・2前		0.5		○									兼1	隔年集中
	生物生産科学フロンティア講義Ⅲ	1・2前		0.5		○									兼1	隔年集中
	生物生産科学フロンティア講義Ⅳ	1・2前		0.5		○									兼1	隔年集中
	生物生産科学フロンティア講義Ⅴ	1・2前		0.5		○									兼1	隔年集中
	生物生産科学フロンティア講義Ⅵ	1・2前		0.5		○									兼1	隔年集中
	生物生産科学フロンティア講義Ⅶ	1・2前		0.5		○									兼1	隔年集中
	生物生産科学フロンティア講義Ⅷ	1・2前		0.5		○									兼1	隔年集中
	生物生産科学フロンティア講義Ⅸ	1・2前		0.5		○									兼1	隔年集中
	生物生産科学フロンティア講義Ⅹ	1・2前		0.5		○									兼1	隔年集中
	生物生産科学フロンティア講義Ⅺ	1・2前		0.5		○									兼1	隔年集中
	生物生産科学フロンティア講義Ⅻ	1・2前		0.5		○									兼1	隔年集中
	生物生産科学特別講義	1・2前		1		○									兼3	集中
	生物生産科学ビジネス戦略特論Ⅰ	1・2前		0.5		○					1					隔年集中
	生物生産科学ビジネス戦略特論Ⅱ	1・2前		0.5		○				1						隔年集中
	生物生産科学英語プレゼンテーション演習Ⅰ	1通	2				○				1					一部集中
生物生産科学英語プレゼンテーション演習Ⅱ	2通	2				○				1					一部集中	
生物生産科学インターンシップⅠ	1前			1				○		1					集中	
生物生産科学インターンシップⅡ	2前			1				○		1					集中	
小計(20科目)		—	5	10	0				6	8	0	0	0	兼15	—	
生産環境科学	専門分野科目	作物生産学特論	1・2後		2		○				1					隔年
		土壌環境学特論	1・2前		2		○				1					隔年
		土壌生化学・物質循環特論	1・2前		2		○			1					兼1	隔年
		植物栄養・肥料科学特論	1・2前		2		○				1				兼1	隔年
		土壌微生物利用・バイオ肥料科学特論	1・2後		2		○			1					兼1	隔年
		家畜生産技術学特論	1・2後		2		○			1	1				兼1	隔年
		昆虫管理学特論	1・2前		2		○				1					隔年
	論文研究等	生産環境科学特別演習Ⅰ	1通	2				○		1	5					
		生産環境科学特別演習Ⅱ	2通	2				○		1	5					
		生産環境科学特別実験Ⅰ	1通	4					○	1	5					
生産環境科学特別実験Ⅱ	2通	4					○	1	5							
小計(11科目)		—	12	14	0				1	5	0	0	0	兼4	—	
植物生産科学	専門分野科目	作物学特論	1・2前		2		○								兼1	隔年
		植生生態生理学特論	1・2後		2		○		1							隔年
		園芸作物学特論	1・2後		2		○			1					兼1	隔年
		植物繁殖学特論	1・2前		2		○				1					隔年
		植物分子生理学特論	1・2後		2		○			1						隔年
		植物遺伝育種学特論	1・2前		2		○				1					隔年
	論文研究等	植物生産科学特別演習Ⅰ	1通	2				○		3	1	1				
		植物生産科学特別演習Ⅱ	2通	2				○		3	1	1				
		植物生産科学特別実験Ⅰ	1通	4					○	3	1	1				
		植物生産科学特別実験Ⅱ	2通	4					○	3	1	1				
小計(10科目)		—	12	12	0				3	1	1	0	0	兼2	—	
動物生	専門分野科目	畜産学特論	1・2前		2		○		1	1					兼1	隔年
		動物組織機構学特論	1・2前		2		○		1			1			兼1	隔年
		蚕糸科学特論	1・2前		2		○				1		1		兼1	隔年
		昆虫遺伝・発生学特論	1・2後		2		○				1		1		兼1	隔年
		昆虫生理化学特論	1・2前		2		○					1			兼1	隔年

産科学	論文研究等	動物生産科学特別演習Ⅰ	1通	2				○		2	2	1					
		動物生産科学特別演習Ⅱ	2通	2				○		2	2	1					
		動物生産科学特別実験Ⅰ	1通	4					○	2	2	1					
		動物生産科学特別実験Ⅱ	2通	4					○	2	2	1					
		小計(9科目)	—	12	10	0	—			2	2	1	2	0	兼5	—	
合計(51科目)		—	41	46	0	—			6	9	2	2	0	兼26	—		
学位又は称号		修士(農学)、修士(学術)		学位又は学科の分野				農学関係									

教育課程等の概要(事前伺い)

(農学府 共生持続社会学専攻)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専攻共通科目	共生持続社会学	1前		1		○			3	3	1					
	共生持続社会学特別講義Ⅰ	1前		1		○										兼1
	共生持続社会学特別講義Ⅱ	1前		1		○										兼1
	共生持続社会学特別講義Ⅲ	1後		1		○										兼1
	共生持続社会学特別講義Ⅳ	1後		1		○				1						集中
	共生持続社会学特別講義Ⅴ	1・2前		1		○					1					兼3 集中
	比較共生社会学	1・2後		2		○										兼1
	インターンシップ実習	1後・2前		1				○			1					集中
	共生環境科学特論Ⅰ	1後		2		○										兼1
	共生環境科学特論Ⅱ	1後		2		○										兼1
	共生環境科学特論Ⅲ	1後		2		○										兼1
	共生環境科学特論Ⅳ	1前		2		○										兼1
	共生環境科学特論Ⅴ	1・2前		2		○										兼1 隔年
	食糧環境科学特論Ⅰ	1・2後		2		○										兼1 隔年
	食糧環境科学特論Ⅱ	1前		2		○										兼1
	食糧環境科学特論Ⅲ	1後		2		○										兼1
小計(16科目)	—		0	25	0	—	—	—	3	5	2	0	0	兼15	—	
共生人間学 / 環境社会学 / 環境社会学関係学 / 食糧環境経済学	環境共生思想	1・2後		2		○					1					
	風土共生倫理学	1・2後		2		○										兼1
	環境共生文化史論	1・2前		2		○			1							
	ヒトと動物の共生心理学	1・2後		2		○				1						
	農村社会学特論	1・2後		2		○					1					
	アニマル・ウェルフェア特論	1・2前		2		○				1						
	環境法特論	1・2前		2		○				1						
	国際関係学特論	1・2後		2		○				1						
	食育・食農教育論	1・2後		2		○			1							
	環境経済学特論	1・2前		2		○				1						
	共生農業特論	1・2後		2		○			1							
	地域農業システム特論	1・2前		2		○					1					
	農業資源経済学特論	1・2後		2		○			1		1					
	食糧関連産業特論	1・2前		2		○						1				兼1 一部集中
食農マーケティング論	1・2前		2		○			1								
論文研究等	共生持続社会学特別研究Ⅰ	1前	2					○	5	5	4					
	共生持続社会学特別研究Ⅱ	1後	2					○	5	5	4					
	共生持続社会学特別研究Ⅲ	2前	2					○	5	5	4					
	共生持続社会学特別研究Ⅳ	2後	2					○	5	5	4					
	共生持続社会学特別演習Ⅰ	1通	2					○	5	5	4					
	共生持続社会学特別演習Ⅱ	2通	2					○	5	5	4					
小計(21科目)	—		12	30	0	—	—	—	5	5	4	1	0	兼2	—	
合計(37科目)	—		20	55	0	—	—	—	5	5	4	1	0	兼17	—	
学位又は称号	修士(農学)、修士(学術)		学位又は学科の分野				農学関係									

教育課程等の概要(事前伺い)

(農学府 応用生命化学専攻)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専攻共通科目	応用生命科学特論Ⅰ	1前	1			○									兼1	集中
	応用生命科学特論Ⅱ	1後	1			○									兼1	集中
	応用生命科学特論Ⅲ	1前	1			○									兼1	集中
	小計(3科目)	—	3	0	0	—	—	—	0	0	0	0	0	0	兼3	—
生体分子化学	生体分子化学特論Ⅰ	1前	2			○			3	3						
	生体分子化学特論Ⅱ	2前	2			○			3	3						
	生体分子化学特論Ⅲ	1・2後		1		○									兼1	隔年集中
	生体分子化学特論Ⅳ	1・2後		1		○									兼1	隔年集中
	論文研究等	生体分子化学特別演習Ⅰ	1通	2				○	3	3						
	生体分子化学特別演習Ⅱ	2通	2					○	3	3						
	生体分子化学特別研究Ⅰ	1通	4					○	3	3						
	生体分子化学特別研究Ⅱ	2通	4					○	3	3						
	小計(8科目)	—	16	2	0	—	—	—	3	3					兼2	—
	生理生化学	生理生化学特論Ⅰ	1前	2			○			4				1		
生理生化学特論Ⅱ		2前	2			○			4				1			
生理生化学特論Ⅲ		1・2後		1		○									兼1	隔年集中
生理生化学特論Ⅳ		1・2後		1		○									兼1	隔年集中
論文研究等		生理生化学特別演習Ⅰ	1通	2				○	4							
生理生化学特別演習Ⅱ		2通	2					○	4							
生理生化学特別研究Ⅰ		1通	4					○	4							
生理生化学特別研究Ⅱ		2通	4					○	4							
小計(8科目)		—	16	2	0	—	—	—	4				1		兼2	—
分子生物学		分子生物学特論Ⅰ	1前	2			○			2	3					
	分子生物学特論Ⅱ	2前	2			○			2	3						集中
	分子生物学特論Ⅲ	1・2後		1		○									兼1	隔年集中
	分子生物学特論Ⅳ	1・2後		1		○									兼1	隔年集中
	論文研究等	分子生物学特別演習Ⅰ	1通	2				○	2	3						
	分子生物学特別演習Ⅱ	2通	2					○	2	3						
	分子生物学特別研究Ⅰ	1通	4					○	2	3						
	分子生物学特別研究Ⅱ	2通	4					○	2	3						
小計(8科目)	—	16	2	0	—	—	—	2	3					兼2	—	
環境老年学	環境老年学特論Ⅰ	1前	2			○									兼3	
	環境老年学特論Ⅱ	2前	2			○									兼3	
	環境老年学特論Ⅲ	1・2後		1		○									兼3	隔年集中
	環境老年学特論Ⅳ	1・2後		1		○									兼3	隔年集中
	論文研究等	環境老年学特別演習Ⅰ	1通	2				○							兼3	
	環境老年学特別演習Ⅱ	2通	2					○							兼3	
	環境老年学特別研究Ⅰ	1通	4					○							兼3	
	環境老年学特別研究Ⅱ	2通	4					○							兼3	
小計(8科目)	—	16	2	0	—	—	—	0	0	0	0	0	0	兼24	—	
合計(35科目)		—	67	8	0	—	—	—	9	6	0	1	0	兼33	—	
学位又は称号	修士(農学)、修士(学術)		学位又は学科の分野				農学関係									

教育課程等の概要(事前伺い)

(農学府 生物制御科学専攻)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専攻共通科目	生物制御科学特論Ⅰ	1前		1		○									兼1 集中	
	生物制御科学特論Ⅱ	1後		1		○									兼1 集中	
	生物制御科学特論Ⅲ	1前		1		○									兼1 集中	
	生物制御科学特論Ⅳ	1後		1		○									兼1 集中	
	生物制御科学特論Ⅴ	1前		1		○									兼1 集中	
	生物制御科学特論Ⅵ	1後		1		○									兼1 集中	
	英語プレゼンテーション演習	1後		1			○								兼1	
	小計(7科目)	—	0	7	0	—	—	—	0	0	0	0	0	0	兼7	—
生物機能制御学 / 生物適応制御学	専門分野科目	植物病理学特論	1・2前		2		○									兼1 隔年
		植物病原学特論	1・2前		2		○			1						兼1 隔年
		生物制御化学特論	1・2後		2		○			1						兼1 隔年
		生理活性天然物化学特論	1・2前		2		○			1						兼1 隔年
		細胞分子生物学特論	1・2後		2		○				1					兼1 隔年
		植物生理学特論	1・2後		2		○			1						兼1 隔年
		発生生物学特論	1・2前		2		○									兼1 隔年
		応用昆虫学特論	1・2前		2		○				1					兼1 隔年
		昆虫生理化学特論	1・2前		2		○				1					兼1 隔年
		天敵微生物学特論	1・2後		2		○				1					兼1 隔年
	生物的制御学特論	1・2前		2		○					1				兼1 隔年	
	創薬化学特論	1・2前		2		○									兼1 隔年集中	
	論文研究等	生物制御科学特別実験Ⅰ	1前	2					○	5	4	1				
		生物制御科学特別実験Ⅱ	1後	2					○	5	4	1				
		生物制御科学特別実験Ⅲ	2前	2					○	5	4	1				
		生物制御科学特別実験Ⅳ	2後	2					○	5	4	1				
		生物制御科学論文演習Ⅰ	1前	1					○	5	4	1				
		生物制御科学論文演習Ⅱ	1後	1					○	5	4	1				
		生物制御科学論文演習Ⅲ	2前	1					○	5	4	1				
生物制御科学論文演習Ⅳ		2後	1					○	5	4	1					
小計(20科目)		—	12	24	0	—	—	—	5	4	1	0	0	兼12	—	
合計(27科目)		—	12	31	0	—	—	—	5	4	1	0	0	兼19	—	
学位又は称号	修士(農学)、修士(学術)		学位又は学科の分野			農学関係										

教育課程等の概要(事前伺い)

(農学府 環境資源物質科学専攻)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専攻共通科目	環境資源物質科学特別講義Ⅰ	1後		2		○									兼1	集中
	環境資源物質科学特別講義Ⅱ	1後		2		○									兼1	集中
	環境資源物質科学特別講義Ⅲ	1後		2		○									兼1	集中
	環境資源物質科学特論	1後		2		○									兼1	集中
	環境資源物質科学コミュニケーション特論	1前		2		○									兼1	
	小計(5科目)	—	0	10	0	—	—	—	0	0	0	0	0	0	兼5	—
環境資源材料学	専門分野科目															
	環境資源計測学特論	1・2前		2		○			1							隔年
	生物物理化学特論	1後		2		○				1						
	分子ダイナミクス学特論	1・2後		2		○			1							隔年
	植物材料物性学特論	1前		2		○				1						
	住環境材料加工学特論	1・2前		2		○					1					隔年
	論文研究等															
	環境資源材料学特別実験Ⅰ	1通	4					○	2	2						
	環境資源材料学特別実験Ⅱ	2通	4					○	2	2						
	環境資源材料学研究報告演習Ⅰ	1通	2					○	2	2						
環境資源材料学研究報告演習Ⅱ	2通	2					○	2	2							
小計(9科目)	—	12	10	0	—	—	—	2	2	1	0	0	0	兼0	—	
資源機能制御学	専門分野科目															
	資源複合機能学特論	1・2前		2		○				1						隔年
	植物繊維化学特論	1・2後		2		○				1						隔年
	バイオマス構造機能学特論	1・2前		2		○				1						隔年
	生分解制御学特論	1・2後		2		○			1							隔年集中
	植物資源形成学特論	1・2前		2		○			1							隔年
	論文研究等															
	資源機能制御学特別実験Ⅰ	1通	4					○	2	4						
	資源機能制御学特別実験Ⅱ	2通	4					○	2	4						
	資源機能制御学研究報告演習Ⅰ	1通	2					○	2	4						
資源機能制御学研究報告演習Ⅱ	2通	2					○	2	4							
小計(9科目)	—	12	10	0	—	—	—	2	4	0	0	0	0	兼0	—	
合計(23科目)		—	24	30	0	—	—	—	4	6	1	0	0	0	兼5	—
学位又は称号	修士(農学)、修士(学術)		学位又は学科の分野				農学関係									

教育課程等の概要(事前伺い)

(農学府 物質循環環境科学専攻)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専攻共通科目	環境生物学特論	1前		2		○			3	3					オムニバス
	環境化学特論	1前		2		○			3	1		1			オムニバス
	国際研究プレゼンテーションⅠ	1・2通		1		○			1						隔年集中
	国際研究プレゼンテーションⅡ	1・2後		1		○									兼1 集中
	小計(4科目)	—	0	6	0	—	—	—	7	4	0	1	0	兼1	—
環境生物学	専門分野科目	大気環境学特論	1・2前		2		○			1					
		環境微生物学特論	1・2後		2		○			1					
		環境植物学特論	1・2後		2		○			1					
		環境汚染生物学特論	1・2前		2		○				1				
		海洋環境生物学特論	1・2前		2		○				1				
		環境生物学特別講義Ⅰ	1・2前		0.5		○								兼1 隔年集中
		環境生物学特別講義Ⅱ	1・2後		0.5		○								兼1 隔年集中
		環境生物学特別講義Ⅲ	1・2前		0.5		○								兼1 隔年集中
		環境生物学特別講義Ⅳ	1・2後		0.5		○								兼1 隔年集中
	論文研究等	環境生物学特別実験Ⅰ	1通	4					○	2	3				
		環境生物学特別実験Ⅱ	2通	4					○	2	3				
		環境生物学研究報告演習Ⅰ	1通	1					○	2	3				
		環境生物学研究報告演習Ⅱ	2通	1					○	2	3				
		環境生物学英語論文講読演習Ⅰ	1通	1					○	2	3				
		環境生物学英語論文講読演習Ⅱ	2通	1					○	2	3				
小計(15科目)	—	12	12	0	—	—	—	2	3	0	0	0	兼4	—	
環境化学	専門分野科目	生物圏物質循環学特論	1・2後		2		○				1				
		有機地球化学特論	1・2前		2		○			1					
		社会・生物地球化学特論	1・2後		2		○			1					
		地球環境化学特論	1・2後		2		○								兼1
		環境毒性学特論	1・2後		2		○			1					
		環境化学特別講義Ⅰ	1・2前		0.5		○								兼1 隔年集中
		環境化学特別講義Ⅱ	1・2前		0.5		○								兼1 隔年集中
		環境化学特別講義Ⅲ	1・2前		0.5		○								兼1 隔年集中
		環境化学特別講義Ⅳ	1・2前		0.5		○								兼1 隔年集中
	論文研究等	環境化学特別実験Ⅰ	1通	4					○	4	2				
		環境化学特別実験Ⅱ	2通	4					○	4	2				
		環境化学研究報告演習Ⅰ	1通	1					○	4	2				
		環境化学研究報告演習Ⅱ	2通	1					○	4	2				
		環境化学英語論文講読演習Ⅰ	1通	1					○	4	2				
		環境化学英語論文講読演習Ⅱ	2通	1					○	4	2				
小計(15科目)	—	12	12	0	—	—	—	4	2	0	0	0	兼5	—	
合計(34科目)		—	24	30	0	—	—	—	6	5	0	1	0	兼10	—
学位又は称号	修士(農学)、修士(学術)		学位又は学科の分野				農学関係								

教育課程等の概要(事前伺い)

(農学府 自然環境保全学専攻)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専攻共通科目	自然環境保全学Ⅰ	1前	2			○			1	1					一部集中
	自然環境保全学Ⅱ	1後	1			○				1					一部集中
	自然環境保全学特別講義Ⅰ	1前		0.5		○									兼1 集中
	自然環境保全学特別講義Ⅱ	1前		0.5		○									兼1 集中
	自然環境保全学特別講義Ⅲ	1後		0.5		○									兼1 集中
	インターンシップ	随時		1				○		1					
	基礎統計学	1前		2		○									兼1 集中
小計(7科目)	—	—	3	4.5	0	—	—	—	1	3	0	0	0	兼4	—
生態系保全学 / 森林環境保全学 専門分野科目	植生管理学特論Ⅰ	1前		1		○				1					集中
	植生管理学特論Ⅱ	1後		1		○				1					集中
	生物多様性保全学特論Ⅰ	1前		1		○			1						集中
	生物多様性保全学特論Ⅱ	1後		1		○			1						集中
	野生動物保全生態学特論Ⅰ	1前		1		○				1					集中
	野生動物保全生態学特論Ⅱ	1後		1		○				1					集中
	野生動物保全政策学特論Ⅰ	1前		1		○			1						集中
	野生動物保全政策学特論Ⅱ	1後		1		○			1						集中
	野生動物救護学Ⅰ	1前		1		○				1					集中
	野生動物救護学Ⅱ	1後		1		○				1					集中
	健康アメニティ科学特論Ⅰ	1前		1		○				1		1			集中
	健康アメニティ科学特論Ⅱ	1後		1		○				1		1			集中
	人間生理生態学特論Ⅰ	1前		1		○				1					集中
	人間生理生態学特論Ⅱ	1後		1		○				1					集中
	森林計画学特論Ⅰ	1前		1		○				1					集中
	森林計画学特論Ⅱ	1後		1		○				1					集中
	森林生態学特論Ⅰ	1前		1		○				1					集中
	森林生態学特論Ⅱ	1後		1		○				1					集中
	山地保全学特論Ⅰ	1前		1		○				1					集中
	山地保全学特論Ⅱ	1後		1		○				1					集中
	森林水文学特論Ⅰ	1前		1		○				1					集中
	森林水文学特論Ⅱ	1後		1		○				1					集中
	森林施設工学特論Ⅰ	1前		1		○					1				集中
	森林施設工学特論Ⅱ	1後		1		○					1				集中
	景観生態学特論Ⅰ	1前		1		○				1					集中
	景観生態学特論Ⅱ	1後		1		○				1					集中
	森林土壌学特論Ⅰ	1前		1		○			1						集中
	森林土壌学特論Ⅱ	1後		1		○			1						集中
	森林利用システム学特論Ⅰ	1前		1		○				1					集中
	森林利用システム学特論Ⅱ	1後		1		○				1					集中
森林-人間系科学論Ⅰ	1前		1		○			1						集中	
森林-人間系科学論Ⅱ	1後		1		○			1						集中	
森林保護学特論Ⅰ	1前		1		○				1					集中	
森林保護学特論Ⅱ	1後		1		○				1					集中	
保全遺伝生態学特論	1後		2		○									兼1	
論文研究等	自然環境科学特別研究	1通	4				○		4	11	1				集中
	自然環境保全学特別研究	2通	4				○		4	11	1				集中
	自然環境科学特別演習	1通	1				○		4	11	1				集中
	自然環境保全学特別演習	2通	1				○		4	11	1				集中
	自然環境科学外語論文講読演習	1通	1				○		4	11	1				集中
	自然環境保全学外語論文講読演習	2通	1				○		4	11	1				集中
小計(41科目)	—	—	12	36	0	—	—	—	4	11	1	1	0	兼1	—
合計(48科目)		—	—	15	40.5	0	—	—	4	11	1	1	0	兼5	—
学位又は称号	修士(農学)、修士(学術)		学位又は学科の分野				農学関係								

教育課程等の概要(事前伺い)

(農学府 農業環境工学専攻)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専攻共通科目	空間情報解析学特論	1前		1		○					1				
	計測工学特論	1前		1		○				1					
	実験計画法特論	1前		1		○			1						
	情報処理学特論	1前		1		○				1					
	数値解析学特論	1前		1		○				1					
	ダイナミクス特論	1前		1		○			1						
	地球統計学特論	1前		1		○			1						
	熱環境工学特論	1前		1		○			1						
	農業・農村政策学特論	1前		1		○				1					
	水環境保全学特論	1前		1		○						1			
	農業環境工学特別講義Ⅰ	1前		1		○									兼1 集中
	農業環境工学特別講義Ⅱ	1前		1		○									兼1 集中
	農業環境工学特別講義Ⅲ	1後		1		○									兼1 集中
	農業環境工学特論Ⅰ	1前		1		○									兼1
	農業環境工学特論Ⅱ	1前		1		○									兼1
	農業環境工学特論Ⅲ	1前		1		○									兼1
	農業環境工学特論Ⅳ	1・2後		2		○									兼1 隔年
	農業環境工学特論Ⅴ	1・2後		2		○									兼1 隔年
	農業環境工学特論Ⅵ	1・2前		2		○									兼1 隔年
	農業環境工学特論Ⅶ	1前		1		○									兼1
	農業環境工学特論Ⅷ	1前		1		○									兼1
	農業環境工学特論Ⅸ	1前		1		○									兼1
	農業環境工学特論Ⅹ	1前		2		○									兼1
小計(23科目)		—	0	27	0	—			4	4	1	1	0	兼13	—
地域環境工学・生物生産工学	カオス農学特論	1後		1		○			1						
	自然エネルギー利用学特論	1後		1		○			1						
	地盤工学特論	1後		1		○									兼1
	システム工学特論	1後		1		○						1			
	生産制御工学特論	1後		1		○				1					
	精密農業特論	1後		1		○			1						
	地域環境解析学特論	1後		1		○					1				
	地水環境工学特論	1前		1		○			1						一部集中
	農村地域計画学特論	1前		1		○				1					
	水利用学特論	1後		1		○						1			
	農業環境工学特別演習Ⅰ	1前	2				○		4	3					
	農業環境工学特別演習Ⅱ	1後	2				○		4	3					
	農業環境工学特別演習Ⅲ	2前	2				○		4	3					
	農業環境工学特別演習Ⅳ	2後	2				○		4	3					
	農業環境工学特別研究Ⅰ	2前	2				○		4	3					
	農業環境工学特別研究Ⅱ	2後	2				○		4	3					
小計(16科目)		—	12	10	0	—		4	3	1	2	0	兼1	—	
合計(49科目)		—	12	37	0	—		4	3	1	2	0	兼14	—	
学位又は称号	修士(農学)、修士(学術)		学位又は学科の分野				農学関係								

教育課程等の概要(事前伺い)

(農学府 国際環境農学専攻)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専攻共通科目	地域社会開発総論	1後		2		○									兼1
	国際農業技術論	1前		2		○									兼1
	地球環境論	1前		2		○			1						
	異文化コミュニケーション学	1後		2		○									兼1
	国際環境農学特論Ⅰ	1後		2		○									兼1
	国際環境農学特論Ⅱ	1・2後		2		○									兼1
	小計(6科目)	-	0	12	0	-	-	-	0	1	0	0	0		兼5
国際環境修復保全学	専門分野科目	地域環境計画学	1前	2		○			1						
	環境修復保全学	1後	2		○			1							
	水利環境保全学	1前	2		○				1						
	水環境評価学	1後	2		○			1							
	論文研究等	国際環境農学コミュニケーション演習	1前	1			○		5	5					
	国際環境修復保全学特別研究	1・2通	6			○		3	2						
	国際環境修復保全学演習	1・2通	4			○		3	2						
	国際環境農学課題別演習	1後	1			○		5	5						
	国際環境農学国内外実習	1後	2				○	5	5						
	副専攻科目	国際環境修復保全学特論	随時	2			○								兼98
	国際環境修復保全学特別演習	随時	2				○								兼98
小計(11科目)	-	18	8	0	-	-	-	5	5	0	0	0		兼98	
国際生物生産資源学	専門分野科目	地域生物機能利用学	1後	2		○			1						
	地域持続生物生産技術学	1前	2		○				1						
	生物資源循環利用学	1前	2		○			1			1				
	生物新機能開発学	1後	2		○				1						
	論文研究等	国際環境農学コミュニケーション演習	1前	1			○		5	5					
	国際生物生産資源学特別研究	1・2通	6			○		1	2						
	国際生物生産資源学演習	1・2通	4			○		1	2						
	国際環境農学課題別演習	1後	1			○		5	5						
	国際環境農学国内外実習	1後	2				○	5	5						
	副専攻科目	国際生物生産資源学特論	随時	2			○								兼98
	国際生物生産資源学特別演習	随時	2				○								兼98
小計(11科目)	-	18	8	0	-	-	-	5	5	0	1	0		兼98	
国際地域開発学	専門分野科目	途上地域人口社会学	1前	2		○			1	1		1			
	環境農業協力論	1後	2		○			1							
	国際地域開発政策学	1前	2		○			1	1		1				
	国際開発協力論	1後	2		○				1						
	論文研究等	国際環境農学コミュニケーション演習	1前	1			○		5	5					
	国際地域開発学特別研究	1・2前後	6			○		1	1						
	国際地域開発学演習	1・2前後	4			○		1	1						
	国際環境農学課題別演習	1後	1			○		5	5						
	国際環境農学国内外実習	1後	2				○	5	5						
	副専攻科目	国際地域開発学特論	随時	2			○								兼98
	国際地域開発学特別演習	随時	2				○								兼98
小計(11科目)	-	18	8	0	-	-	-	5	5	0	2	0		兼98	
D o u b l e	Regional Environmental Conservation Planning	1前		2		○			1						
	Environmental Rehabilitation and Conservation	1後		2		○			1						
	Environmental Water Use & Conservation	1前		2		○				1					
	Aquatic Environmental Assessment	1後		2		○				1					
	Utilization of Regional Biological Functions	1後		2		○			1						
	Regional Sustainable Bio-Production Technology	1前		2		○				1					
	Sustainable Utilization of Biological Resources	1前		2		○			1			1			
	Improvement of Biological Functions	1後		2		○				1					
	Population Sociology	1前		2		○			1	1			1		

D e g r e e	S t u d i e s	International Cooperation on Sustainable Agriculture	1後		2			○			1							
		International Rural Development Policy	1前		2			○			1	1		1				
		International Development and Cooperation	1後		2			○				1						
		Special Lecture for Agricultural DDP I ()	随時		2			○										兼114
		Special Lecture for Agricultural DDP II ()	随時		2			○										兼114
		Special Lecture for Agricultural DDP III ()	随時		2			○										兼114
C o u r s e	R e s e a r c h S u b j e c t s f o r T h e s i s	Orientation Exercise for International Environmental and Agricultural Research	1前	1				○			5	5						
		Research in International Environmental and Agricultural Science	1・2前後	6				○			5	5						
		Exercise for International Environmental and Agricultural Science	1・2前後	4				○			5	5						
		Subjective Exercise for International Environmental and Agricultural Research	1後	1				○			5	5						
		Practical Exercise for International Environmental and Agricultural Research	1後	2					○		5	5						
		S u b c o u r s e L e c t u r e s	S u b c o u r s e R e s e a r c h	Subcourse Research in International Environmental and Agricultural Science	-	2				○								
Subcourse Exercise for International Environmental and Agricultural Science	-			2				○									兼98	
小計 (27科目)				18	30	0		-		5	5	0	3	0			兼114	
日 本 語 科 目	日本語コミュニケーション I		1後			6	○										兼1	
	日本語コミュニケーション II		1前			4	○										兼1	
	小計 (2科目)				0	0	10		-		0	0	0	0	0			兼2
合計 (62科目)			-	72	66	10		-		5	5	0	3	0			兼121	
学位又は称号		修士 (農学)、修士 (学術)		学位又は学科の分野				農学関係										